

フリーダイヤル10年 チャイルドラインに届いた声から 子どもの状況を考察する



もくじ

はじめに	P 1
総論	
10年のデータから見える、子どもたちの声	P 2～3
“数字”で見る10年	P4
“グラフ”で見る10年	P5～13
分析編	
いじめ	P14～16
虐待	P17～19
ネットトラブル	P20～23
性の多様性	P24～25
希死念慮	P26～28
座談会	
フリーダイヤル10年のデータから見えた子どもたち	P29～36
～内田良さんを迎えて～	
声をつないでいく	P37
名古屋大学教育発達科学研究科 内田良	
資料編	P38～40
まとめ	P41

はじめに

振り返ってみますと、日本にチャイルドラインが産声をあげたのは1998年、東京せたがやにおいてでした。チャイルドライン支援センターは1999年に設立、チャイルドライン実施団体は全国各地に草の根のようにひろがり、現在68団体（+2準備団体）が地域で日々子どもたちの「声」を受けとめています。

本編では、全国统一フリーダイヤルを開始した2009年4月から2019年3月の10年間の電話及びオンラインチャットの子どもたちに寄せられた声を分析し社会発信することを目的に編纂しました。

チャイルドラインの根っこにあるのは、「子どもの権利」です。重大な子どもへの権利侵害である「いじめ」「虐待」「ネットトラブル」「性の多様性」「希死念慮」の切り口からこの10年間の社会の変化と関連付けながら分析をしていきます。

子どもは、社会の写し絵です。子どもたちは、その大きな環境である社会のありように影響され、逆に社会に影響を与えていきます。

子どもたちの「声」を分析することは、私たち大人が問われることに繋がるのです。

1994年、生存、発達、保護の権利群と共に高らかに参加の権利を発信した「国連子どもの権利条約」を日本が批准、必然的にチャイルドラインという社会システムが生まれました。

コロナ期と呼んでも過言ではない現在（そしてこれから）、「子ども」を受け身の存在におとしめるのではなく、社会を担っていくパートナーと捉え、子どもの声の代弁者となり、投げかけてくる思いや願いを「提言化」するのが、チャイルドラインの使命と考えています。

チャイルドラインは、これからも子どもと共にこの社会をつくっていく決意です。

尚、本紙の編纂、分析にあたって専門家である名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授の内田良氏より外部からの鋭くも温かい視点でご助言いただきました。本当にありがとうございました。

私たちなりの分析、提言です。最後までご高覧いただければ幸いです。

認定 NPO 法人チャイルドライン支援センター 代表理事 竹村 浩

10年のデータから見える、子どもたちの声

概要

チャイルドラインは、フリーダイヤル実施以前は各地の実施団体による「独自回線」で運営していましたが、全国的な電話番号の統一のための準備を行い、2007年から「全国統一フリーダイヤル」を試行しました。2009年4月から本格運用を開始しています。これまで、子どもの声を届けるために、チャイルドラインにかかってきた「子どもの声」を「年次報告」にて報告・発信を続けてきました。今回は本格運用開始年度である2009年度から2018年度の10年間にフォーカスを当て、「データから見える子どもたちの声」として紹介します。

1. 今回の集計期間

- 【第1期】電話：2009年4月1日～2011年3月31日（12月29日～1月3日は休止）
- 【第2期】電話：2011年4月1日～2016年3月31日（12月29日～1月3日は休止）
- 【第3期】①電話：2016年4月1日～2019年3月31日（12月29日～1月3日は休止）
②チャット：2018年3月1日～2019年3月31日（12月29日～1月3日は休止）

2. 実施時間

- 【第1期～第2期】
電話：月曜日～土曜日 16時～21時（基本）（電話）（5月の連休、9月1日前後など「キャンペーン期間」として設定した特別体制の場合は、15時～23時など変則的な場合があります）
- 【第3期】
①電話：2016～2017年度：月曜日～土曜日 16時～21時（基本）
2018年度：月曜日～日曜日 16時～21時（基本）
（5月の連休、9月1日前後など「キャンペーン期間」として設定した特別体制の場合は、14時～23時など変則的な場合があります）
②チャット：2018年度 木曜日、金曜日を中心に16時～21時

3. 実施回線等

- 【電話：第1期～第3期】
①全国統一フリーダイヤル（0120-99-7777・無料）
②実施団体独自のフリーダイヤル（地域によって番号が違う。直接番号にかける・無料）
③実施団体独自の直通回線（一般の電話番号にかけてもらう・有料）
- 【チャット：第3期】
④インターネットホームページ上からアクセスする専用チャット（<https://childlin.or.jp/chat>）

4. 対象者

18歳以下の子ども

5. 受け手要件

全国の実施団体が主催する「受け手養成講座」（20時間以上）を受講し、トレーニングを積んだ上で「受け手」承認された一般市民（公的資格等は問いません）

集計データ概要

A トラヒックデータ

電話：NTTコミュニケーションズ株式会社のトラヒック集計サービスツールにより取得しています。
チャット：株式会社ジーニーのChamoチャットシステム「AI.BiS」より取得しています。

B データベース

- ・「受け手」が子どもの声をもとに感じた情報を、子どもが特定できないように加工した上でのデータとして集積してきました。
- ・全国の実施団体、チャイルドライン支援センターにおける活動実績の情報として活用しています。

データベースにおける特徴・注意点

- データ項目については、2011年度と2016年度に見直しを行い、改定しています。そのため項目内容が改定の際に追加・削除されているものがあります。
- データベースの主な項目内容：組織（入力した団体）、フリーダイヤルか直通か、発信地（都道府県）、着信年月日、開始・終了時刻、通話時間、発信端末（携帯・固定・チャットなど）、会話成立（成立か不成立か無言か）、年齢（おおよその学年）、かけ手の性別、環境（主にどの場所の話か）、関係性（主に対象人物は誰か）、事柄（具体的な主訴）、電話をかけた動機（かけた理由）、気持ち（どんな気持ちを持っているか）など（集計期間によって項目名称などは変更されているため、ここでは主に最近のデータベースを基にしています）。
- チャイルドラインは匿名性の尊重がスタンスとしてあり、同じ人が複数回かけくる場合もあるため、同じ内容の件数が増加する（累計として集計）という、データ特性があることに留意が必要です。
- 特段の表記がない限り「年度」（4月1日～3月31日）で集計を行っています。
- 集計にあたっての「分母」は、基本【会話成立】を母集団にしています。
- 2011年度と2016年度の項目改定は、時代の状況に合わせて、より特徴的なデータを拾う目的で行いました。

集計にあたっての作業

A トラヒックデータ

電話とチャット共に、毎月1回、NTTサーバ上にあるデータ記録をダウンロードし、一つのファイルにまとめ、各実施団体に共有を行ってきました。また、毎年度末にも1年間のデータとしてのまとめを作成。今回は、それらの10年分のデータを集計・集約し直し、入力ミスや誤計算等を点検し直すなど、データクリーニングを行いました。

B データベース

各実施団体が記入した10年分のデータを、一括してダウンロード。その後、二重入力、誤入力、未記入項目、明らかに矛盾したデータの抽出などを中心として、明らかに修正が必要な個票データは修正を行い、判別不能なものは削除を行うなどのデータクリーニングを行っています。

Aデータ・Bデータ共通して、改めて集計・データクリーニングを施しました。したがって、これまでチャイルドライン支援センターが発行してきた「年次報告書」等で発表しているデータとは、必ずしも一致するとは限りません。また、この報告書を作成するにあたって、データの集計や出力、クロス分析作業に、BIツールの「[tablau](#)」を活用し、分析やグラフ化等の整理を行いました。

”数字”で見る10年

トラヒックデータ (NTT サーバーデータ)

かけた人数 のべ 276万63人	あきらめた人数 のべ 50万1,986人	つながった人の割合 81.8% (単純計算)
総発信数 6,521,738件	10年平均通話時間 5分22秒 (1着信あたり)	10年総通話時間 18万7,342時間

データベース (数字の1,000件未満は四捨五入)

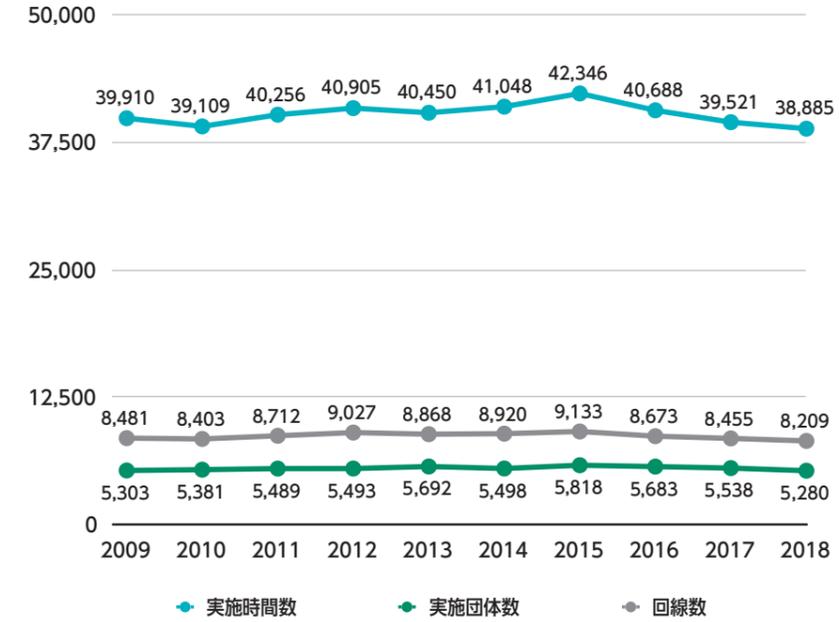
全体の件数		
着信 210万2000件	発語あり 109万2000件	会話成立 73万7000件
発語なし・無言 99万2000件	お試し・いたづら 8万5000件	問い合わせ・お礼 4000件
どの場所での話だったか		
学校 20万2000件	部活 1万4000件	家庭 10万6000件
職場・バイト 5000件	地域 1万1000件	インターネット 5000件
どんな内容か		
自分自身 25万2000件	人間関係 11万9000件	雑談 9万1000件
恋愛 3万9000件	性 12万7000件	身体に関すること 3万3000件
勉強・成績 1万9000件	進路・生き方 1万9000件	自分に自信がない(気持ち) 2万6000件
深刻な項目の一部(今回の報告書で分析する項目)		
いじめ 4万5000件	希死念慮(自傷行為含む) 9500件	虐待 1万3000件
ネットトラブル 3万7000件	性の多様性 7300件	

※上記のデータは、10年間でどのくらいのボリュームがあるのかを、おおよそ理解するための可視化を目的として掲載しました。
 ※したがって、データはテーマごとに集計しており、一部、分母が異なる場合があります。(例えば、「人間関係」については、各環境の人間関係を合計して集計するなど)
 ※集計項目は、2009年度～2010年度、2011年度～2015年度、2016年度～2018年度で、項目の内容が異なっている場合があります。項目内容を精査して集計しています。
 ※集計項目によっては、同じ内容を繰り返しかけてくる子どもや作話、相談以外の目的でかけてくる傾向があるなど、集計データにおいてはそれぞれ「特性」があることに留意が必要です。これらは今後、詳細分析が必要であることを前提として掲載しています。

”グラフ”で見る10年

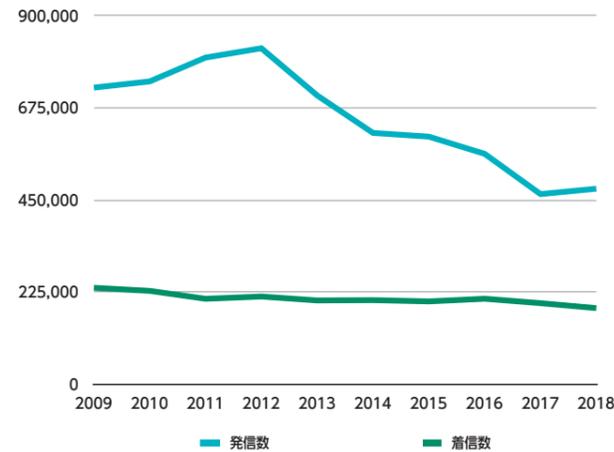
トラヒックデータ

実施団体数・実施時間数・回線数・推移

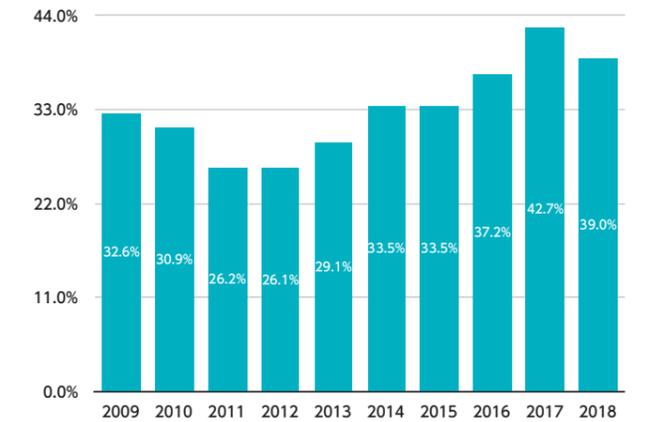


1日ごとの実施団体・実施時間・その日の最大回線の数を合計した。1年間でおよそ4万時間実施し、10年合計40万時間を超える。実施団体は5000団体台、最大回線は8000～9000回線で推移している。チャイルドラインの実施体制が安定的に維持されてきたことがわかる。

発信数と着信数 推移



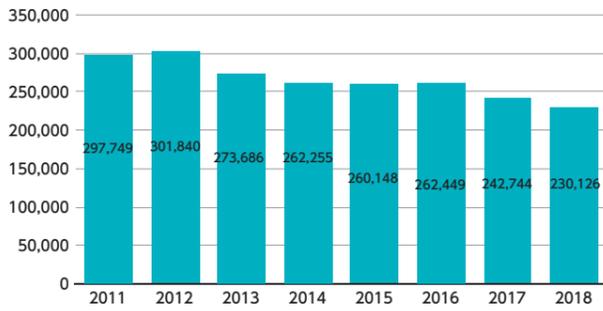
着信率 推移



発信数は前半に多く、後半にかけて下がっている一方で、着信数は安定している。発信数は、その日にかける人数や実施団体・回線数、1人の通話時間の長さに影響をうける。(つながらなかった場合、何度もかけ直す可能性が高くなる。)

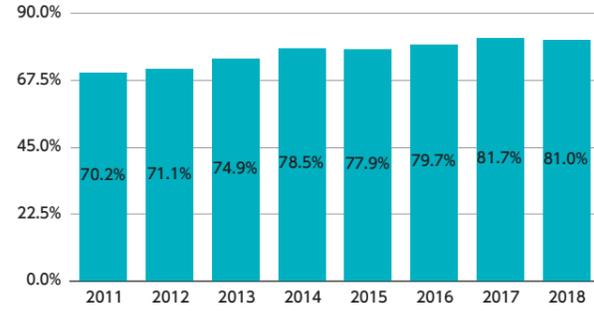
着信率は、発信数を分母とした割合。比較的後半の割合が高くなっている。背景に発信数が減少し着信できるようになったこと、着信によって繰り返し発信する数が減ったことなどが考えられる。

かけた人数推移



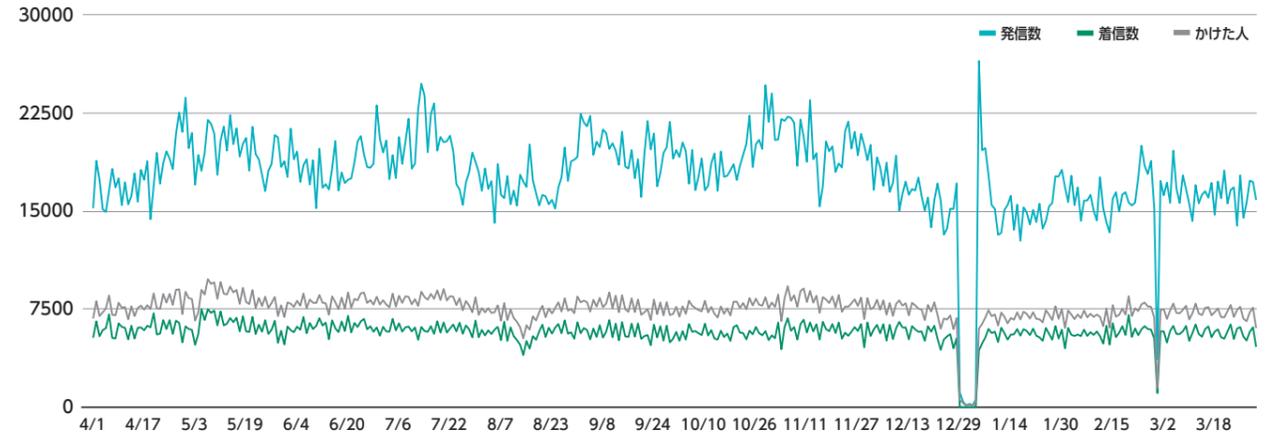
NTTのシステム集計による、おおよその「電話をかけた人数」(正確な人数ではない)。「発信数」が、80万件台~45万件なのに対して、20万~30万人なので、同じ人がつながらないなどの理由で複数回、かけていることがわかる。

つながった割合 推移



NTTシステムで集計された、「かけた人」のうち、つながった人の割合。かけた人の減少などの理由により、つながった率が徐々に高くなっている。

発信・着信・かけた人の365日別累積推移



発信・着信・かけた人で、10年間を「365日別」で集計してみると、発信数では、1月4日が高くなっている。これは、年末年始に実施を休んだことの影響と、休日明けの1月4日の回線が少ないなどが重なり、つながりにくく、同じ人が何度もかけたなどの理由が考えられる。3月2日付近が少なくなっているのは2月29日。その他、いくつか小さな山や谷があるが、チャイルドラインのキャンペーン時期(5月連休など)やカードやポスターの配布時期など、広報のタイミングにも影響していると思われる。

電話種類割合 推移



携帯・固定・公衆電話の割合。携帯電話・スマホの子どもへの普及により、携帯の割合が増えている。

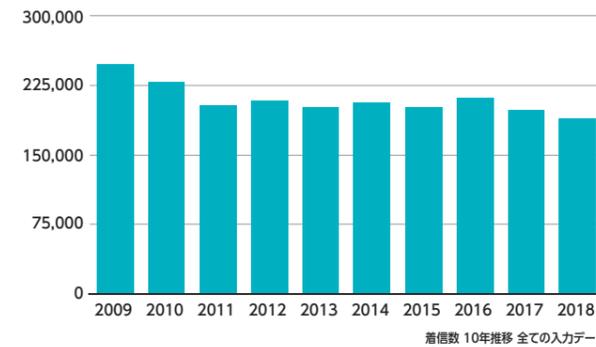
通話時間、5分未満・5分・10分以上割合 推移



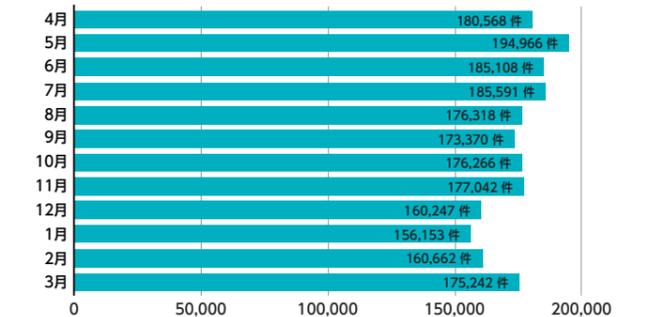
通話時間を3つのグループに分けた、割合。多少の変化があるが、約6割の「5分未満」は、すぐ切れたり無言だったりが多くを占める。

データベース

着信件数 年度別推移



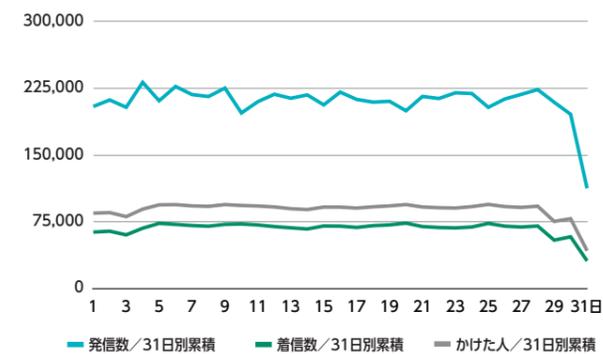
着信件数 月別累計



2009/10年度はキャンペーン等の強化で件数は増加しているが、そのほかは概ね、年20万件で推移している。

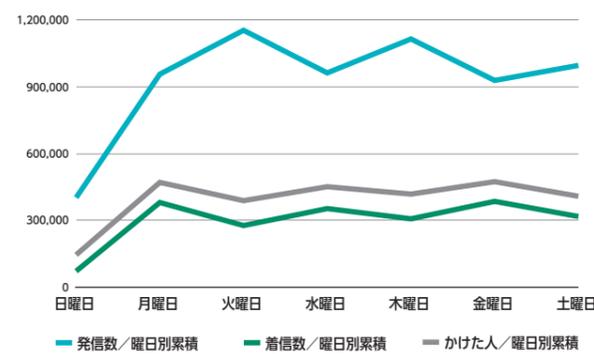
各年度の件数は次の通り。 2009年度=248,092件、2010年度=229,452件、2011年度=203,034件、2012年度=209,264件、2013年度=202,330件、2014年度=207,161件、2015年度=202,152件、2016年度=211,829件、2017年度=198,674件、2018年度=189,545件、合計=2,101,533件

発信・着信・かけた人の31日別累積推移



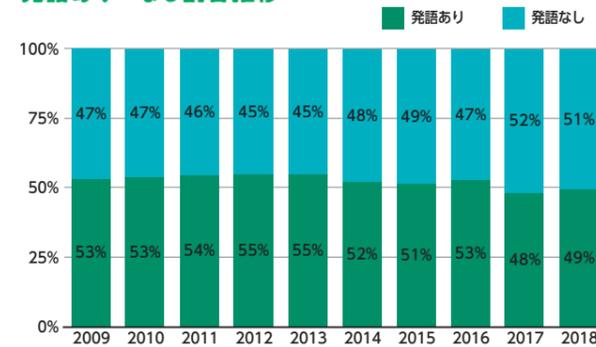
10年間の毎月の「1日~31日」を全て合計した、月内の傾向。1~3日・29日~31日がやや少ないのは年末年始の休止や暦が影響しているため。発信数がやや上下している背景は、今のところ不明。

発信・着信・かけた人の曜日別累積推移



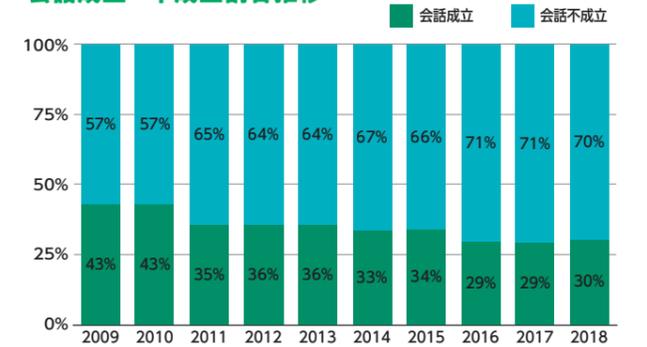
10年間の曜日の累計。日曜日が少ないのは実施した日数や回線が少ないため。件数集計なので、実施体制(団体数・回線数・実施時間)に関係している。したがって、火曜・木曜は他の曜日より回線数などが少なかったため、着信が少なく、何度もかけることで発信が多い傾向。「かけた人」が着信とほぼ連動している理由は、今後、分析が必要。

発語あり・なし割合推移



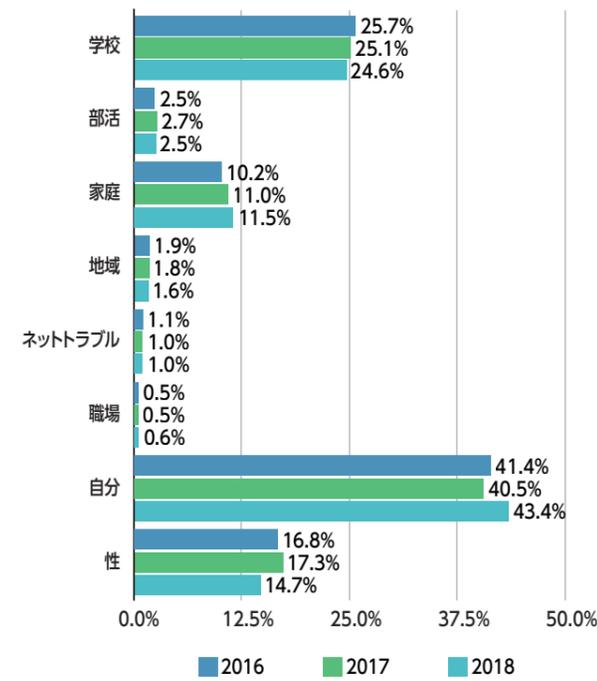
発語ありは、なんらかの発せられたもの。発語なしは、着信後すぐ切れたり無言など。やや発語が多いが、概ね半々となっている。

会話成立・不成立割合推移



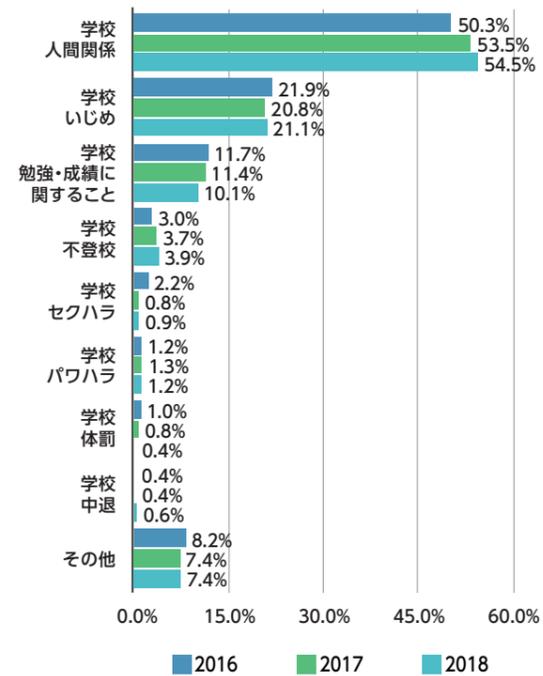
会話成立は、「受け手」との会話のできたもの。不成立は、すぐ切れた、一言・意味不明、無言など(大人の電話も入る)。概ね会話成立が3割~4割だが、少なくなっている。

主訴／各項目の推移【大分類】 (2016年度～18年度／割合%)



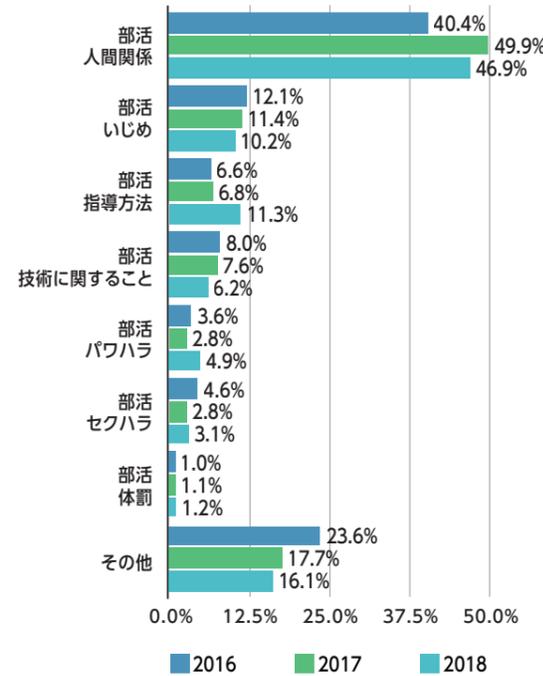
2016年度以降は、大きな項目分類として「自分」が一番高く、「学校」「性」「家庭」の順で高い。集計項目を全面的に変更したため、他の期間とは比較しにくいですが、他の期間の「関係性」と照らしてみても、おおよその割合は変わっていない可能性がある。年度比較においては、「学校」が2018年度にかけて割合が低くなる傾向とは逆に「家庭」の割合が2018年度にかけて高くなる傾向にある。また、2018年度に「自分」がやや高く、「性」が低くなっている。

主訴／【学校カテゴリの内訳】 (2016年度～18年度／割合%)



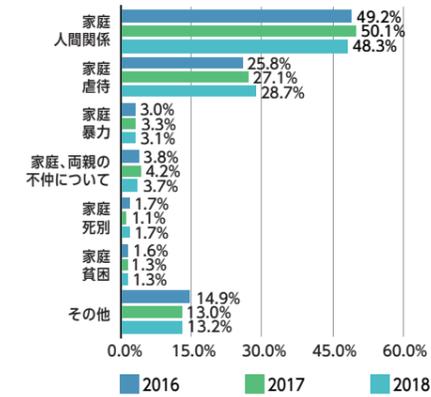
「人間関係」が、2018年度にかけて割合が高くなっている。「いじめ」に関しては割合がほぼ変わっていない。「不登校」がやや上昇傾向にある。

主訴／【部活カテゴリの内訳】 (2016年度～18年度／割合%)



「人間関係」が年度によって違いがある。部活の「いじめ」は割合が低くなる傾向。「指導方法」と「パワハラ」が2018年度に高くなっている。

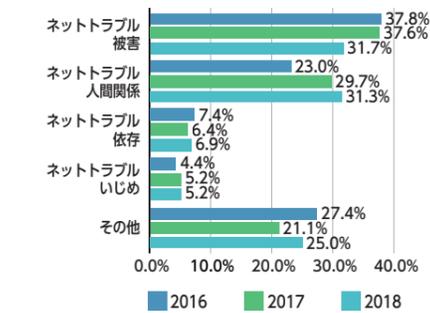
主訴／【家庭カテゴリの内訳】 (2016年度～18年度／割合%)



「虐待」が18年にかけて高くなる傾向にある。

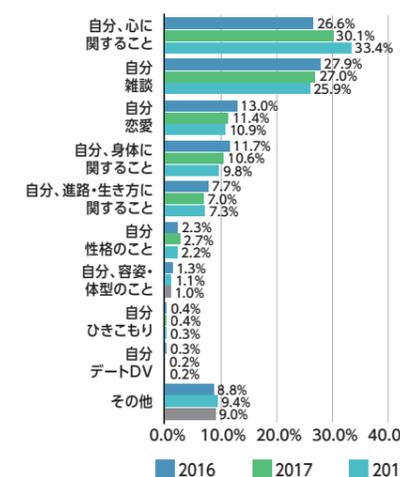
主訴／【ネットトラブルカテゴリの内訳】 (2016年度～18年度／割合%)

(2016年度～18年度／割合%)



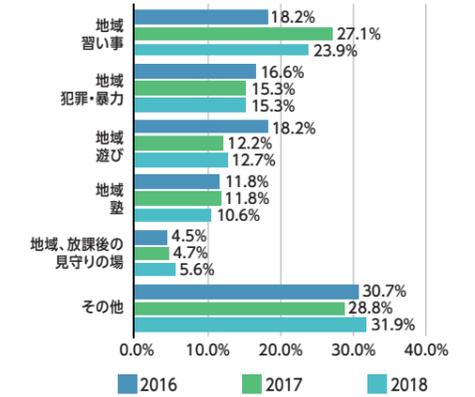
「被害」が18年度に下がる傾向にある一方で、「人間関係」は上昇している。また、他のカテゴリと違い「被害」の割合が高いことが特徴である。

主訴／【自分カテゴリの内訳】 (2016年度～18年度／割合%)



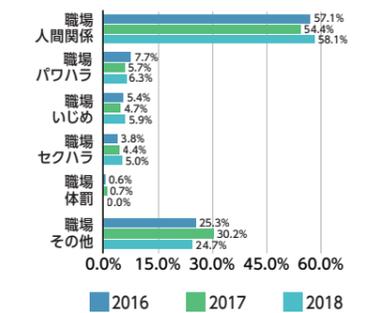
「心に関すること」が18年度にかけて割合が高くなる傾向で、「雑談」は低くなる傾向にある。

主訴／【地域カテゴリの内訳】 (2016年度～18年度／割合%)



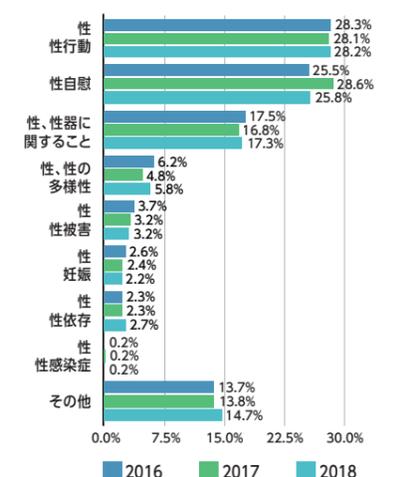
2016年度に「習い事」についてが低い一方で、「犯罪・暴力」「地域・遊び」が高い。

主訴／【職場カテゴリの内訳】 (2016年度～18年度／割合%)



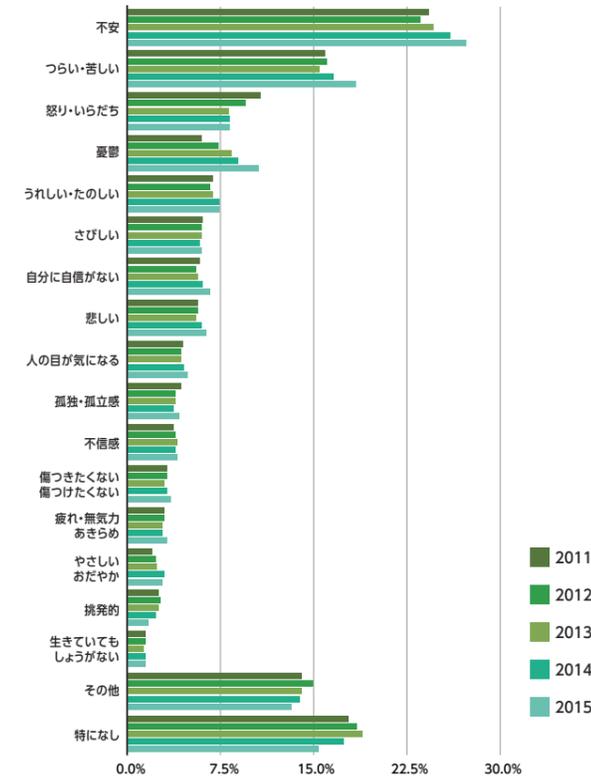
「人間関係」が一番割合が高い。

主訴／【性カテゴリの内訳】 (2016年度～18年度／割合%)



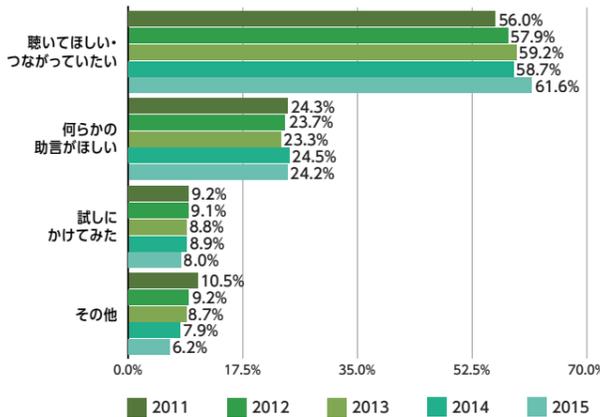
「自慰（行為に関すること）」が17年度に高い。

気持ち／各項目の推移 (2011年度～2015年度／割合%)



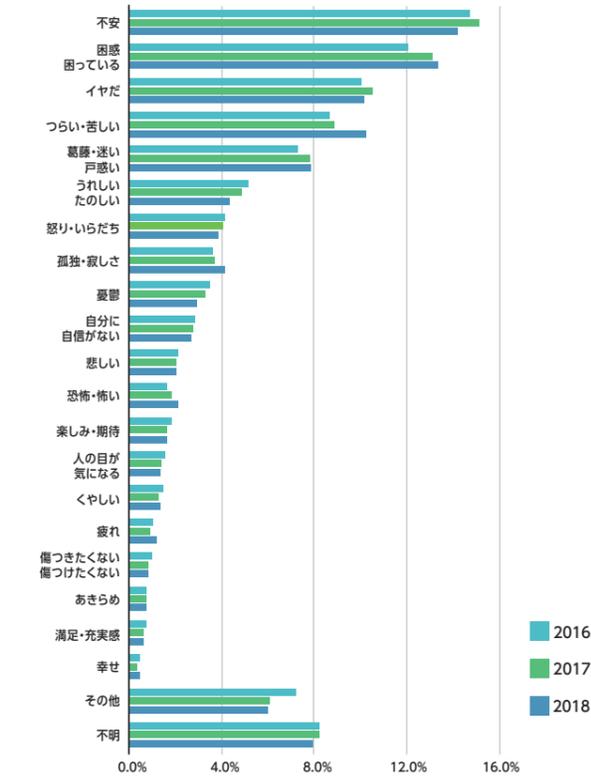
子どもたちがどんな「気持ち」を持っているのか、「受け手」が感じた印象で集計（2011年度～2015年度は複数選択）。「不安」「つらい・苦しい」が多い。「不安」「つらい・苦しい」「憂鬱」「うれしい・楽しい」「自分に自信がない」「悲しい」などは2014年度～2015年度にかけて、割合が高くなる傾向。また「不安」「憂鬱」の変化が他項目と違う傾向にある。

動機／各項目の推移 (2011年度～2015年度／割合)



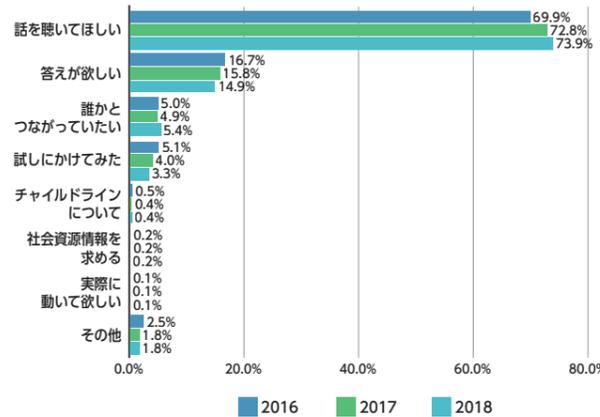
「動機」についての「受け手」の印象を集計。2011～15年度は複数選択で集計。「聴いてほしい・つながっていたい」が一番多く、また年度比較でやや高くなる傾向にある。「何らかの助言がほしい」子どもも2割強いる。

気持ち／各項目の推移 (2016年度～2018年度／割合%)



2016年度以降は、単数選択で集計しているため、グラフを分けた。「不安」「つらい・苦しい」に加え、新たに加わった「困惑・困っている」「イヤだ」「葛藤・迷い・戸惑い」が割合が高い。年度比較においては、「困惑・困っている」「つらい・苦しい」に変化が見られる。

動機／各項目の推移 (2016年度～2018年度／割合)



2016年度以降は、単数選択で集計しているため、グラフを分けた。「聴いてほしい・つながっていたい」は18年度にかけて割合が高くなる傾向にあり、逆に他の項目の割合が低くなる傾向にある。

チャイルドラインに届いた子どもたちの声をデータとして見たときにいくつかの気づきがありました。

発信数は2012年度にピークを迎え、翌年以降2017年度までは減少し続けました。この要因としては、子ども人口の減少以外にも、着信率が上がったことで繰り返し発信する数が減ったことも考えられます。月別では7月、6月、4月が多くなっています（5月は24時間のキャンペーンを実施した年度もあるので除く）。

電話種類では、家庭での固定電話所有率や公衆電話の減少に伴い、2009年度に64.5%だった携帯電話の割合が毎年上がり、2018年度には77.4%になっています。ただ、携帯電話を持っていない子どもが、チャイルドラインにアクセスできないような対応が必要と考えます。

年齢では、2009年度に27%だった小学生の割合が徐々に減少し2018年度は20%となり、中学生は25%前後でほぼ横ばいです。一方で高校生年代は2009年度の47%から徐々に上がり2018年度には55%になっています。小学生の発信が減っている原因として、家庭の固定電話や公衆電話の減少が考えられます。

性別では、2009年度では男子の割合が59%と高かったが、2018年度には男子51%、女子49%と女子の割合が高くなってきました。男子の方が気持ちを抱え込んで話さなくなっているかもしれません。

話の場所（環境）に関しては、データ集計方法の変更に伴い変化しているが、2016年度以降でみると「自分自身」が40%台前半「学校」が20%台後半を占めています。自分自身の心や体のことや、学校でのことを話したいということが変わらず多く続いていると言えます。

話の関係性（話の対象）については、「自分」が平均51%と最も高く、次が「友人・知人」21%、「親（父親母親）」9%と続いています。ここでも「自分」が高く、子どもたちは自分自身のことを見つめようとしていることがわかります。

主訴については、データ集計方法の変更により10年間の流れ・累積としては把握しにくいですが、総じて「人間関係」「雑談・話し相手」「性」が常に高い割合になっています。子どもは人のかかわりについて不安が高く、性については身近な人に相談しにくいことが考えられます。雑談については、信頼できる大人かどうかで不安で雑談から話す場合と、身近に話せる人がいない場合などが考えられます。雑談も子どもにとって大切なコミュニケーションなのです。

気持ちに関して、「不安」の割合がずっと高くなっています。不安の要因について、主訴では「人間関係」が多いことから、他者とのかかわりの中で不安になっていることが考えられます。また、「話の関係性」においては「自分」が多いことから、自分のことに関しても不安を抱えていると思われます。

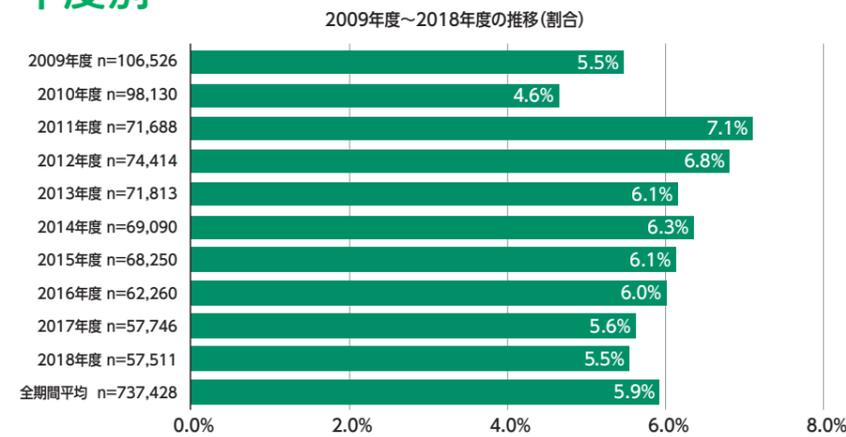
動機については、「聴いてほしい・つながっていたい」が一番多く、年々増えてきています。子どもは「解決策」を第一に求めているのではなく、まずは自分の話を誰かに聴いてほしいと思っていることがはっきりと見て取れます。大人は自分の思い込みで、問題解決のための回答ばかりを考えるのではなく、子どもが実際に感じている思いを受けとめていかなければなりません。

チャイルドラインの10年間のデータには、子どもを取巻く環境や状況の変化が子どもに与えた影響や、10年間変わらず子どもたちが抱えている不安や悩みなどが表れていると言えます。私たち大人は、子どもの声をしっかりと受けとめ、子どもが生きやすい社会の実現を目指していかなければなりません。



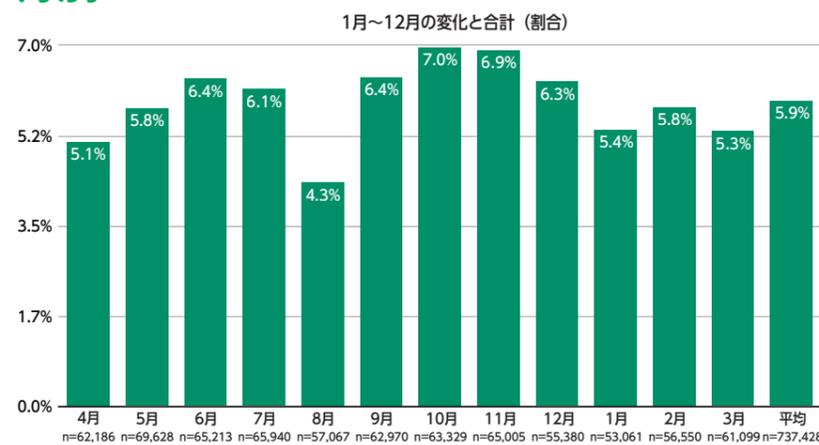
1 10年間のデータより

年度別



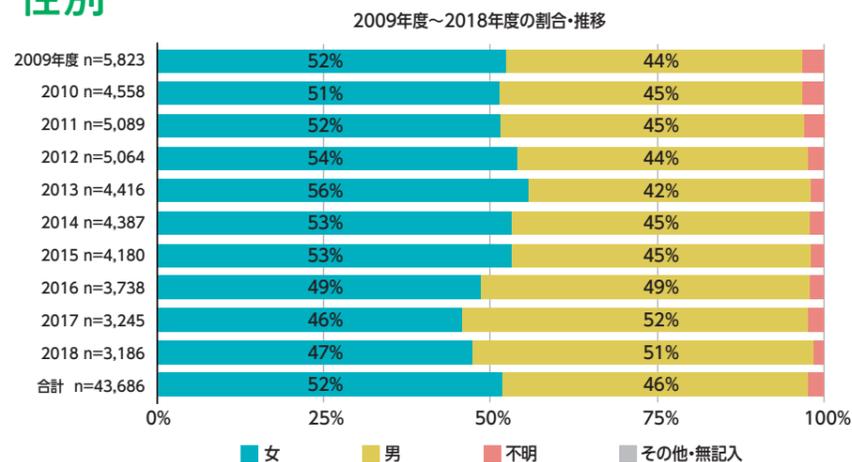
いじめを主訴とする割合は、2009年度・2010年度は、5.5%・4.6%でしたが、集計方式が変わった2011年度の7.1%を最高に、緩やかに割合が低くなっています。

月別



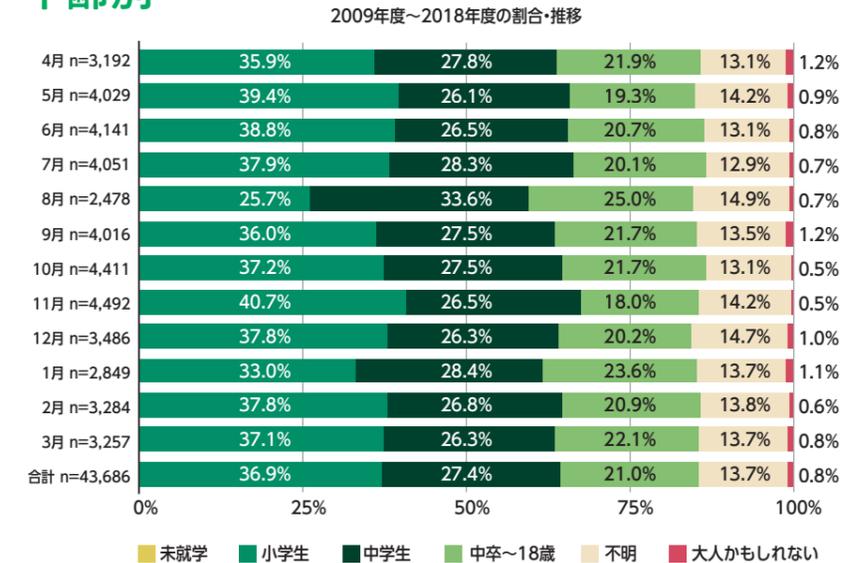
月別累積で、会話成立に対する「いじめ」の割合をみると、高い割合を示しているのは、10月と11月で、おおむね1学期後半と2学期が高くなっています。

性別



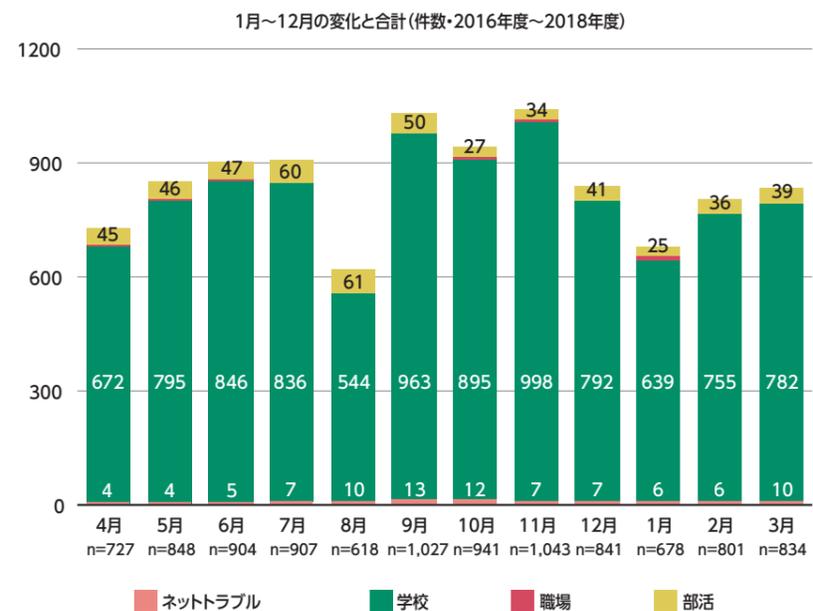
2015年度までは、女子が過半数を占めていたが、2017年以降は逆転して、男子が過半数を占めました。今後、理由について背景分析が必要かと考えられます。

年齢別



月別の累積件数を分母にして、年齢別の割合を見てみました。小学生は、8月と1月に割合が少なくなり、反対に中学生と中卒～18歳は、高くなる傾向にありました。また、年齢別に割合の高い月は、小学生は11月、中学生は8月、高校生も8月となっています。

場所

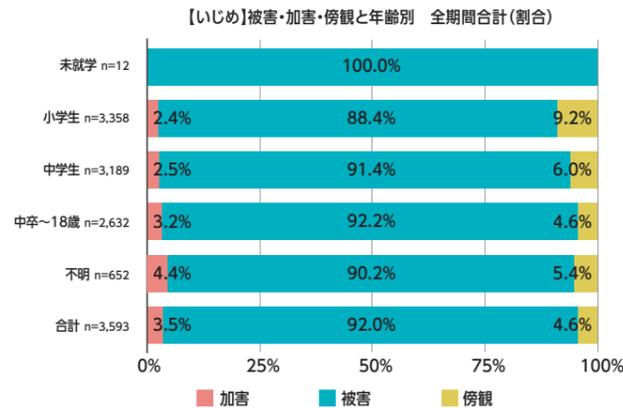
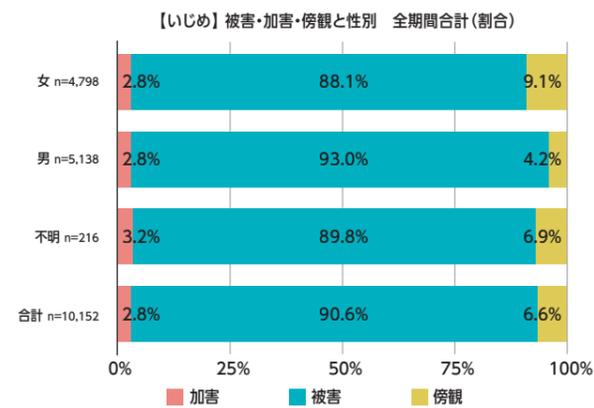


場所(どこでのいじめか)については、2014年度まで、「部活カテゴリ」が「学校」に含まれていたため、「部活カテゴリ」がある2016年度以降のデータで集計しました。全体として「学校」が圧倒的に多く、この期間においては、9月から11月までが比較的トラブルの多い傾向があります。「部活」でのいじめは件数が少ないので参考値ですが、7月・8月にやや件数の増加が見られました。

いじめの被害・加害・傍観

男子は女子より「被害」の割合が多く、「加害」は同程度ですが、「傍観」は女子の割合が男子の倍になっています。年齢別にみると「被害」「加害」ともに年齢が高くなるにつ

れ割合が高くなっています。「傍観」については小学生の割合が高くなっています。女子、小学生がいじめを見て心を痛め、何とかしたいと悩んでいる傾向が強く表れています。



2 社会情勢との関係

いじめ防止対策推進法が公布され、文部科学省のいじめの認知件数が増えましたが、チャイルドラインでのいじめの件数は大きく変わっていません。いじめが減少するほど効果が出ていないということが考えられます。

いじめに関する報道では、子どもの自死があってから「背景にいじめがあった」という報道がほとんどで、「いじめ」が「自死」につながっている印象を持たれやすく、子どもが受ける心理的衝撃は大きいと思われます。

3 データに見る感想や提言

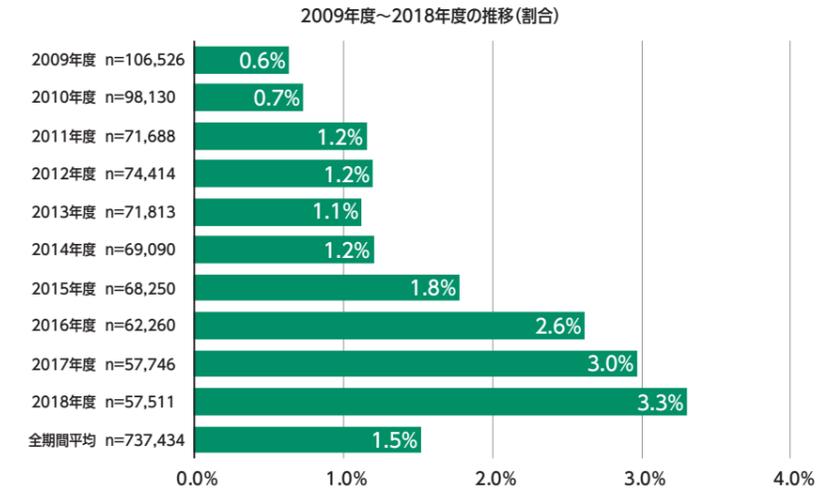
子どもがいじめの悩みから解放されるためにも、チャイルドラインや各相談機関は子どもが相談しやすくなるしくみや工夫に取り組みなければならないと考えます。いじめに耐え切れなくて自殺する前に「誰かに相談したい、話したい」と思う子どもは多いのかもしれませんが、そうであるならば、学校や子どもにかかわる活動場所、相談機関などは、常に子どもの様子に気を配ったり、相談しやすい状況を整えることで、いじめを減らしていけるのではないかと考えます。

チャイルドラインの現場感覚としては、子ども、とくに女子中

高生は「人間関係」での悩みを話してくることがここ数年増えてきていると感じています。子どもは自分が遭っていることを「いじめ」と思いたくないという心理が働いたり、「いじめ」が深刻化する前の段階で「人間関係」として相談しているのかもしれませんが、子どもが話してくる内容を「それくらい」とか「そんなに重くない」と矮小化して聴くのではなく、話の背景やその後のことも想像しながら受けとめていくことが、子どもが話しやすくなるためには必要ではないでしょうか。

1 10年間のデータより

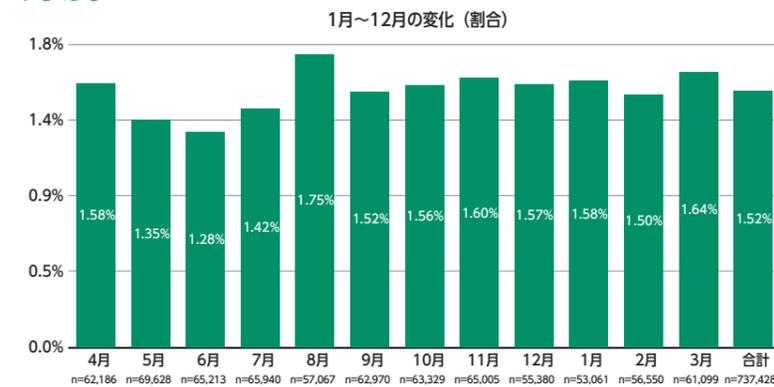
年度別



チャイルドラインには子どもたちから多くの電話が入ります。その中で虐待についてはそれほど多くはありません。10年間のトータルで見れば全体の1.5%です。けれど、虐待の電話については注意が必要です。

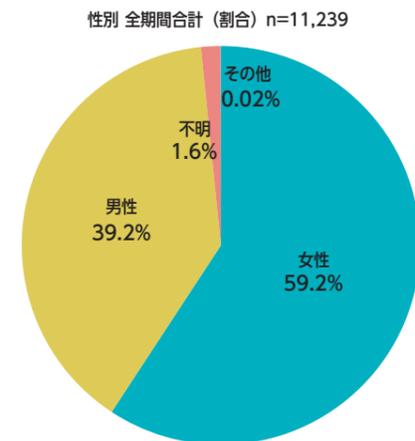
2009年は全体の0.6%でしたが、徐々に増加し2018年には3.3%と5倍以上になっています。2015年頃より虐待を話す子どもは目立つようになっています。2018年の目黒区で起きた5歳女児の事件が報じられると、受信数は跳ね上がりました。「勉強をしなかったり、親の言うことをきかなかったりしたら、罰を受けてもしょうがない」と思っていたことが、社会からは「悪いことをしたからと言ってひどい罰を受ける必要はない」と証明されたように感じたのではないのでしょうか。

月別



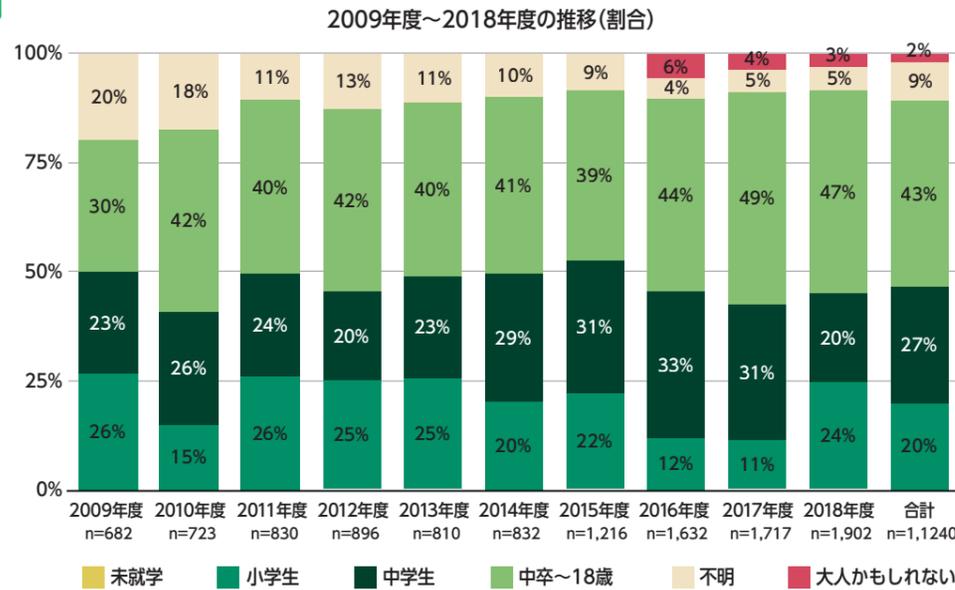
月別で見ると、4月8月3月は若干多く、5月6月7月は減っていますが、一年を通して割合は大きくは違いは無いと考えられます。

性別



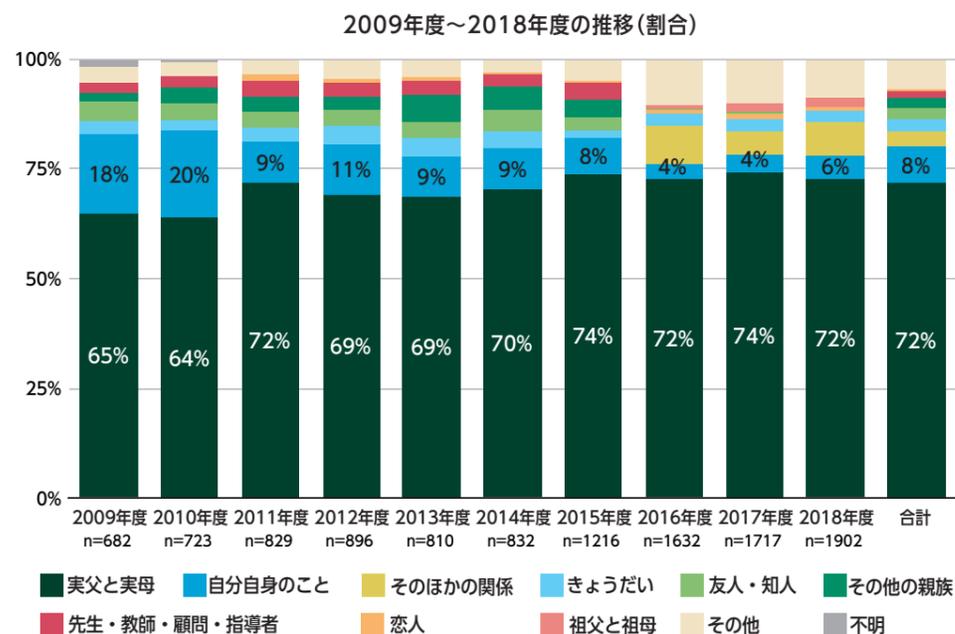
女子6割、男子4割と、女子の方が多い傾向があります。しかし、この数年は男子の件数も増加しています。

年齢別



高校生年代が多くなっています。親の対応について言葉にして出すことができる年齢だと思われます。が、2017年には中学生、2018年には小学生高学年が多くなっています。

関係性



親(実父・実母)が一番多くなっています。関係性の中に自分自身のことが入っているのは、問題が起きた場合に原因は自分にあると子どもは考えがちだからです。親を悪者にしたくない子どもの気持ちの表れと考えられます。

2 社会情勢との関係

電話からは、子どもの言葉の変化が見えています。20年前は「お母さんに怒られた、悪いことをしてしまった」という落ち込んだ声の告白でした。そんな反省の言葉から「お母さんがご飯を作ってくれない」「友達の家は〇〇なのに私の家はそうではない」など親からの自分への対応に疑問を呈する言葉が出てくるようになります。近年は「親が自分の話を聞いてくれない」「親の言うとおりにしないと怒られる」「お父さんに触られる」などや「これって虐待ですよ」などと訴えてくるが増えてきています。

身体的虐待、性的虐待、ネグレクト、心理的虐待と四種類の虐待を子どもは身を持って感じて、自分の状況を客観的に見られるようになったこともあるのかと感じます。

2018年3月目黒区で5歳女児の死亡事件発生、2019年1月野田市で10歳女児の死亡事案発生、2019年6月札幌市で2歳女児の死亡事案発生と多くの子どもの命が失われ、とても痛ましい事件の記憶を多くの人に残しました。

メディアがこのような事件を社会に報じたことは、法改正に向けても一石を投じました。1989年11月20日に「子どもの権利条約」が国連総会で採択され、日本は1994年にこれを批准しました。日本では「児童虐待の防止等に関する法律」(通称 児童虐待防止法)が2000年11月に施行されました。2008年4月に児童虐待防止法・児童福祉法が改正され、2020年4月には体罰禁止の法制化等で児童の権利擁護が強化されています。

このように法改正されてはきましたが、児童相談所・警察・学校・自治体の連携は思うように進みませんでした。あいかわらず虐待児童の死亡事件が報じられます。大人から見てもなかなか前進しない連携に業を煮やしていましたが、そんな状況を子どもも感じ取ったに違いありません。

3 データに見る感想や提言

大人が子どもを叱ることは必要な時がありますが、怒りをぶつけるような言葉や態度、暴力など、子どもの人権を無視したもので子どものプラスにはなりません。また、間違った対応(マルトリートメント)の中で育った子どもは、新たに虐待を繰り返してしまう可能性が高まります。

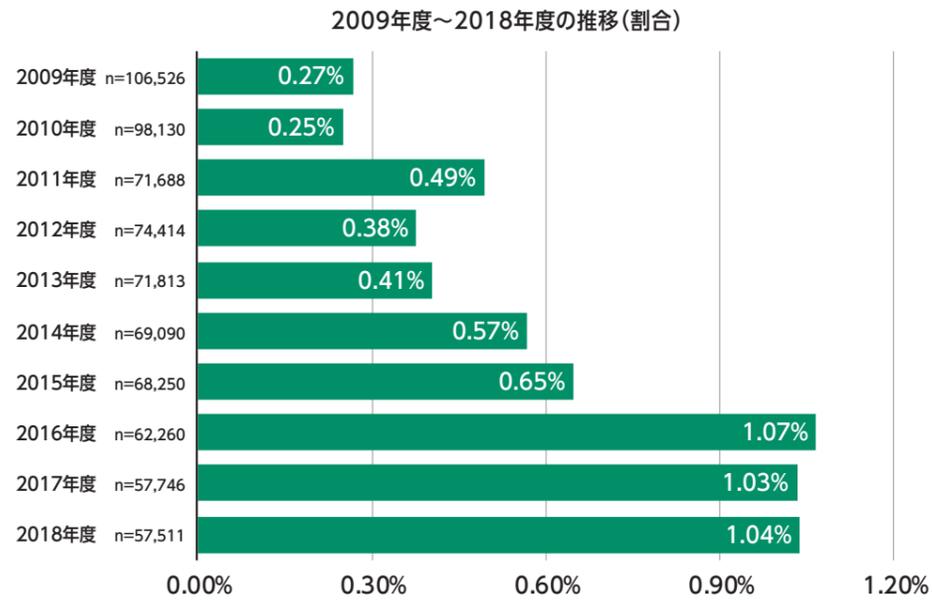
「虐待」を感じることは子どもには難しいことだと思います。家庭とはこんなものと思っていたところが、友人の家庭を見るような経験があったり、学校生活の中から気づいたりすることで自分の置かれている環境について考えることに繋がるようです。また、子どもを見守る多くの大人が地域に増えていけば、子どもを守ることに繋がります。

子どもが自分の権利や自分のあるべき姿を知り、自分で考えることができるようになれば、自分の生きる方向も見つけられるでしょう。また、不満を言葉にして伝える力をつけられれば、自分で道を切り開いていくこともできるようになります。けれど、その力を削ぎ落すような、子どもの存在を否定する虐待があることも事実です。

社会や大人が子どもの保護や福祉のための法を制定すると同時に子どもの権利を理解すれば、子どもが健やかに育つ平穏な社会が作られていきます。子どもに正しい知識を伝えるということは、学校の勉強だけでなく、人として生きていく生と性の知識も伝えていくということなのではないでしょうか。

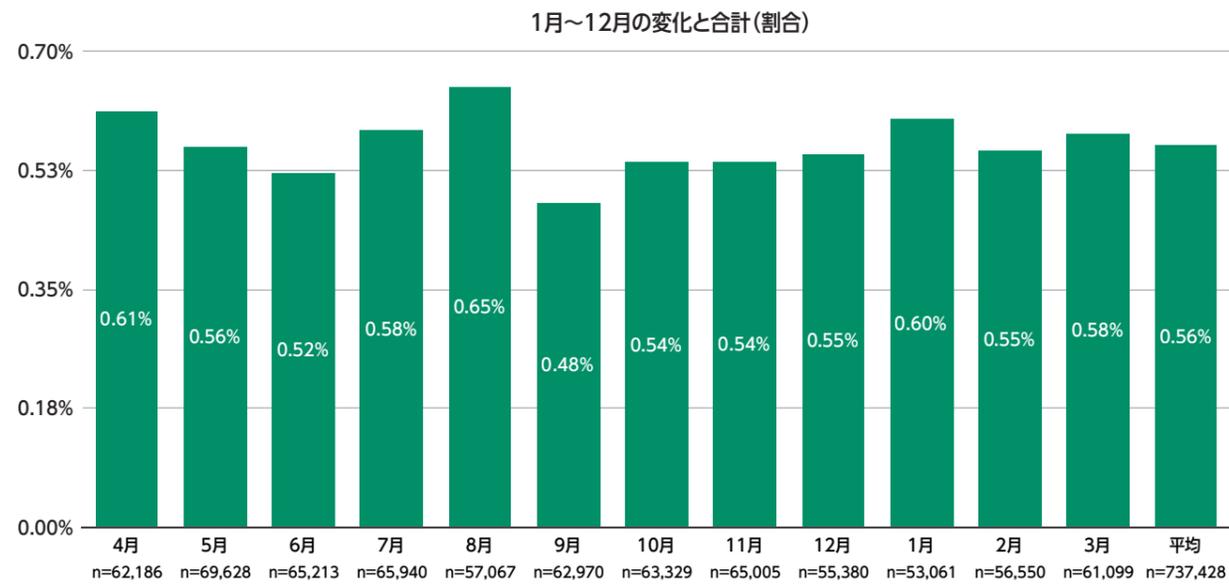
1 10年間のデータより

年度別



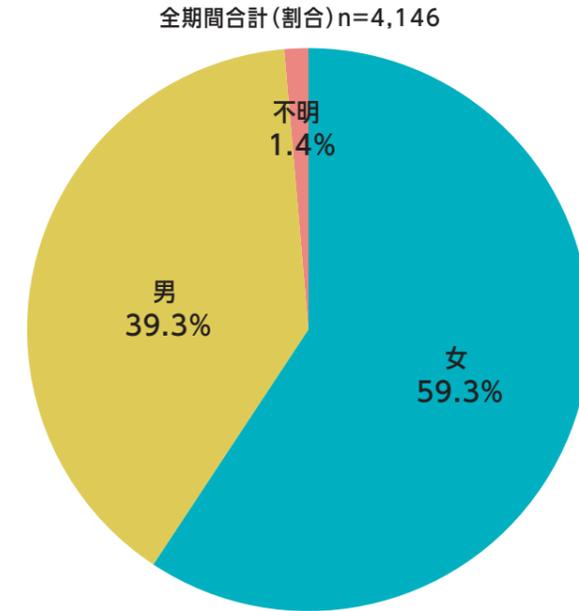
ネットトラブルに関する割合は、全体としては1%程度ですが、年度ごとに見ると変化が見られます。2011年度、2016年度の項目内容の変更による割合の違いはありますが、2015年にかけて緩やかに高くなっています。2016年度以降は1%程度で推移しており、この数字がどのような理由・背景にあるのかは、今後分析が必要です。

月別



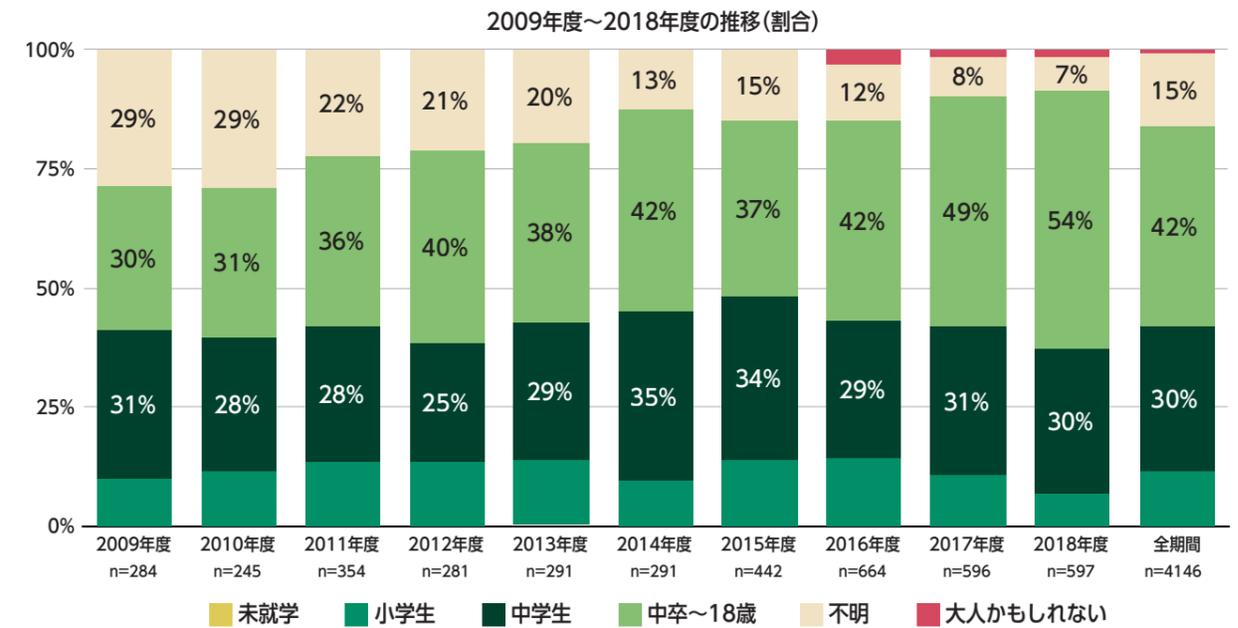
月別累計で見ると、4月、7月、8月、1月がやや高い割合です。特に夏休みの8月の高さは、子どもたちのネット利用時間にも関係しているようです。

性別



全体と相違が見られるのが性別の割合です。全体データでは男子が56.2%、女子が43.8%なのに対し、ネットトラブルは男子が39.3%、女子が59.3%と、女子の割合が高くなっています。女子のネットトラブルは、様々な要素が背景にあることが関係していると思われるので、今後、分析が必要です。

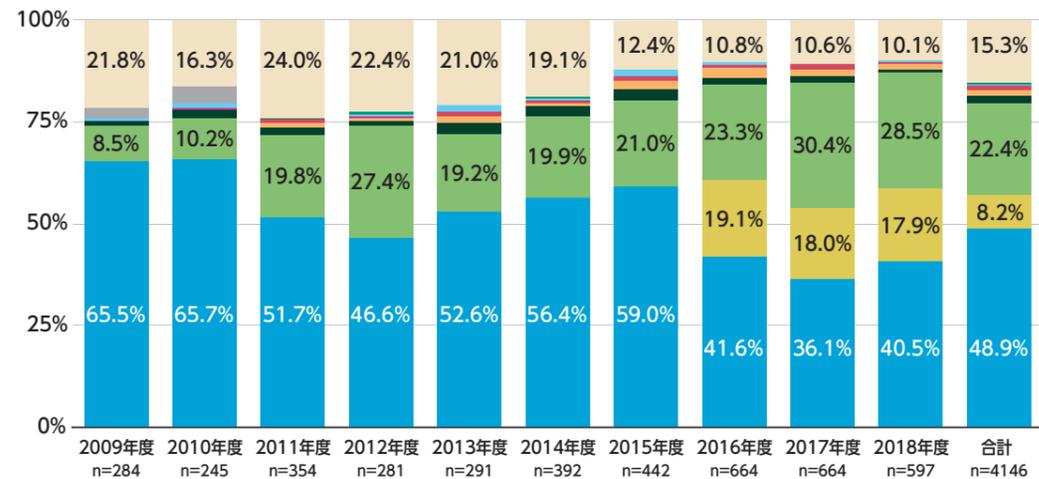
年齢別



年齢別では、集計方法の変更があり中卒～18歳までの2016年度以降の割合が高くなっている。小学生・中学生は2012年度から割合が高くなっている傾向も見取れます。

関係性

2009年度～2018年度の推移(割合)



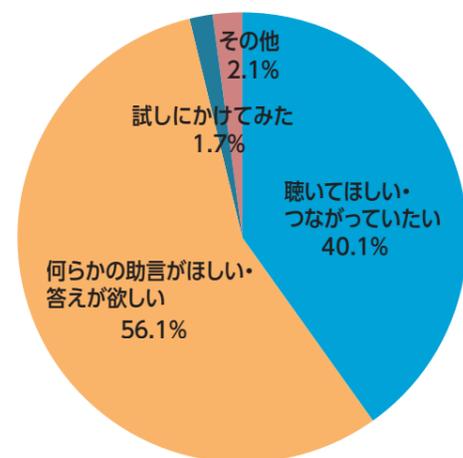
■ 自分 ■ そのほかの関係 ■ 友人・知人 ■ 親(父親・母親) ■ 恋人 ■ 先生・教師 ■ きょうだい ■ 不明 ■ その他の親族 ■ その他

「友人・知人」のトラブルが2013年度以降、割合が高まっています。いわゆる「ネットいじめ」もこの中に含まれている可能性があります。また「自分」については、変化はあるものの一番高い割合を示しています。ネットで架空請求等を受けての戸惑いや、個人情報に対する拡散の心配、ネットを長時間使う自分はおかしいのか、出会い系サイトでつながった人

がいるが不安など、さまざまな要因が考えられますが、いずれにせよ「自分は悪いことをしたのではないか」と言った、自分の内面への不安や困惑・戸惑いや怖さがあることがこの数字の背景かと考えられます。また、2016年度以降にある「そのほかの関係」は、ネット上の他人との関係そのもののトラブルも含まれています。

動機

全期間合計(2011年度以降・割合) n=3,617



動機は2011年度以降の集計です。「聴いて欲しい・つながっていたい」については、全体の割合では、50～70%なのに対して、ネットトラブルでは、40%程度にとどまり、むしろ「何かの助言が欲しい・答えが欲しい」割合が、全体では10～20%に対して、56.1%と大きな違いを示しています。ネットトラブルは具体的な問題が生じ、どうすればいいかについての「具体的な答え」を必要としている様子が見えます。

2 社会情勢との関係

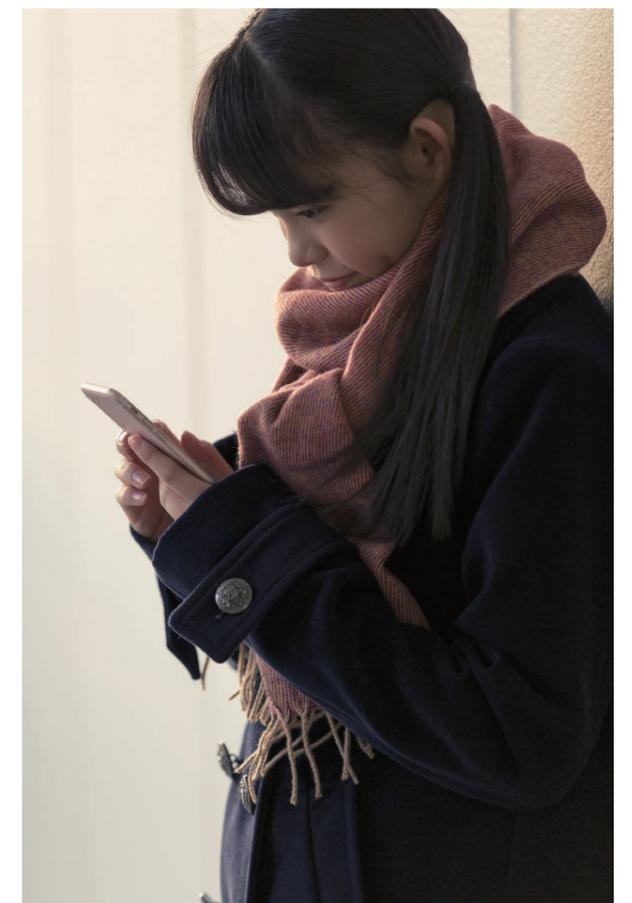
子どもに関係するネット環境の出来事を見てみると、2014年にInstagramの日本版サービスが開始され、2015年にはオンラインゲームのバズドラ（パズル&ドラゴン）やモンスター（モンスターストライク）が高い売上を維持した上でさらにFGO(FateGrandOrder)というゲームも売上げを伸ばしました。さらにオンラインでのコミュニケーションソフト「Discord」がリリースされ、それを利用したボイスチャットがゲームに親和性のある人たちのコミュニケーションの主流となり、ボイスチャットでの通話も当たり前になりました。

2016年にはインターネット上で的人権侵害事件数が前年比10.0%増の1909件に上り2001年の調査開始以来最多となり、翌2017年も前年比16%増で過去最多を更新。※（法務省発表）そのような状況の中、ネットで知り合った見知らぬ

人に希死念慮を伝えた若者9人が殺害される座間市殺害事件が起きました。2017年3月には法務省が「スマートフォンの普及などによりインターネットの匿名性や情報発信の容易さを悪用した人権問題が青少年を中心に発生している」とし、防止に向けた啓発活動を行っていきと発表しています。インターネットでの人権侵害の件数は2017年をピークに2018年以降減少はしましたが、2016年より多い件数で推移しており、※（法務省発表）また近年も若者がSNS上での匿名の誹謗中傷を受けて自殺している事件が複数報道されているように厳しい状況です。チャイルドラインにかかるネットトラブルの件数も、2017年をピークに減少していますが2015年よりも多い件数で推移しているところはインターネットでの人権侵害の件数推移に類似しています。

3 データに見る感想や提言

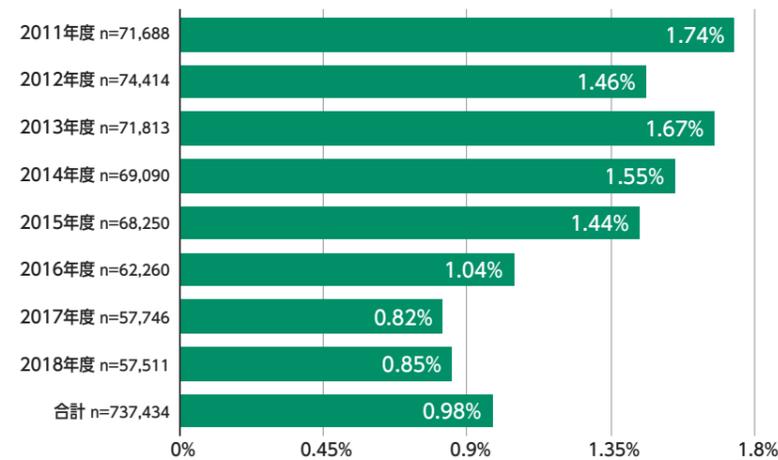
ネットトラブルに関する電話の内容は、以前は架空請求（アダルトサイト閲覧に伴うものなど）が多かった（関係性としては「自分」として分類）が、近年はLINE外しやネットいじめ、リベンジポルノ（関係性としては「友人・知人」に分類）など、多岐にわたってきています。分析結果でもわかるように「誰かに聴いてほしい・話したい・つながりたい」という動機よりも「解決したい」という思いが強い傾向がありますが、内容の背景に後ろめたさを抱えているなど人に言えない心情もあるため、名乗らなければならないような相談窓口には話しにくいのではないかと考えられます。それゆえネット上で知り合った人に相談し、かえって問題が大きくなること起きているのではないかと思います。ネット上のトラブルは犯罪被害につながるものや加害者になることもあるため、敷居の低い相談窓口が必要です。インターネットでの人権侵害やチャイルドラインにかかるネットトラブルの件数が2017年にピークとなっているのは、法務省の2017年の啓発が功を奏したとも考えられます。引き続き社会全体でネット環境の適切な利用や被害・加害の予防・保護に取り組むべきだと思います。子どもたちは、ネット上の大人の気づかないところや想定していない手段で危険に晒されています。子どもが被害者・加害者にならないためにも、子どものみならず保護者にもネットリテラシー教育が必要不可欠であると痛感しています。



1 10年間のデータより

年度別

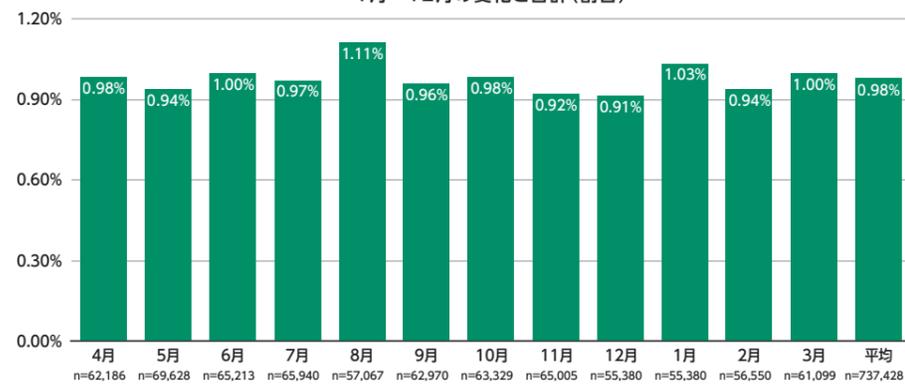
2009年度～2018年度の推移(割合)



2011年度より集計を始めており、2016年度のデータベースの見直し時に項目の変更がありました。また2016年度に性的な違和感を訴える大人の頻回通話者に対応したことでデータが変化しています。2016年以降、年間400件以上のアクセスがあります。性別に対する違和感は言葉にすることも難しく、また対応する相手の反応も当人にとってはとても気になることだと考えられます。「性の多様性」は電話よりもチャットの方が語られる割合が高くなっています。

月別

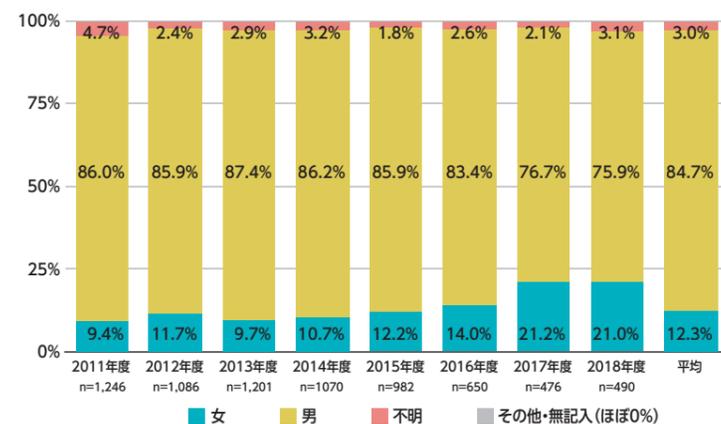
1月～12月の変化と合計(割合)



月別では大きく特徴は見られませんが、8月に増えているのは夏休みが関係しているのではないかと考えられます。

性別

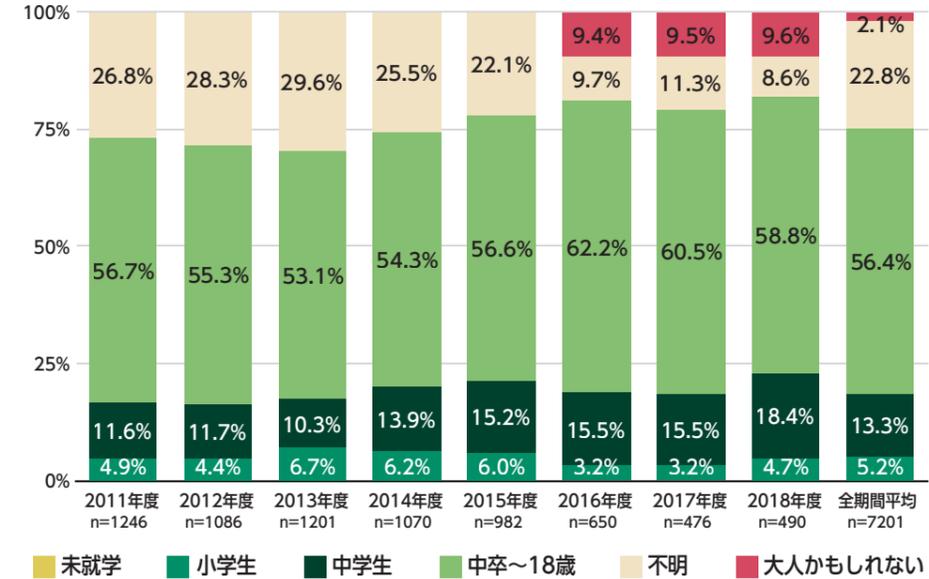
2009年度～2018年度の推移(割合)



性別はその子が生物学的にどちらの性であるかということでデータを取っています。10年の総数の男女別で見ると男子が圧倒的に多いことがわかりますが、年度ごとで見ると女子の割合が増えてきています。社会での性の多様性に関する様々な動きが後押ししているのかもしれない。

年齢別

2009年度～2018年度の推移(割合)



年度推移を見てみると高校生年代が圧倒的に多いですが、近年は高校生年代の割合が減少し中学生が増えてきています。多様な性の情報が高校生年代以外の子どもたちの中にも広が

がっていて、自分の違和感を話せるようになってきたのではないのでしょうか。

2 社会情勢との関係

2005年から2010年にかけて、KABA.ちゃん、ミッツ・マングローブ、はるな愛、マツコ・デラックスなどセクシャルマイノリティの人たちが自身のセクシャリティをカミングアウトして盛んにメディアに出るようになりました。社会に多様な性があることを知らせるためには大切な存在でした。しかし、マイ

ノリティの人たちが一般的な社会人として生きていくモデルにはなりません。芸能界や風俗業でしか生きていけないのではないかと不安になった子どももいたと聞きます。そしてその頃はまだまだ FtM (身体的性が女性で性自認男性) の人たちは声を上げにくい現状がありました。

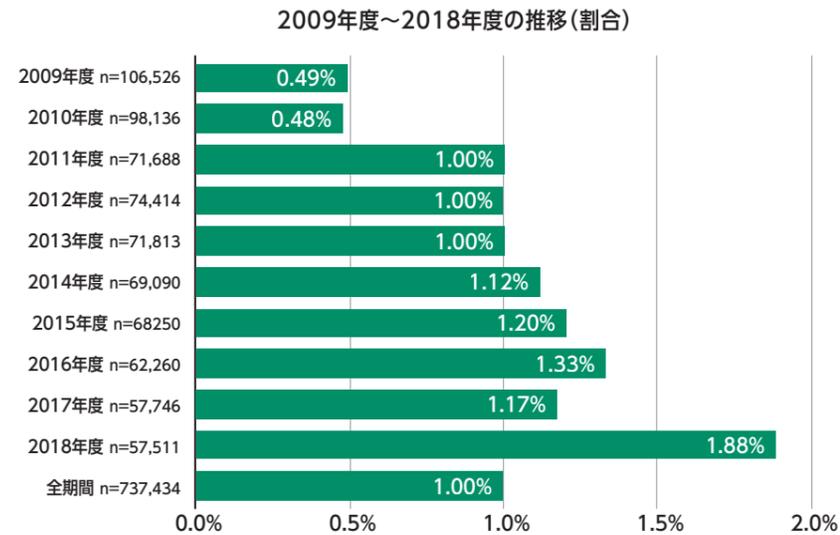
3 データに見る感想や提言

以前は「女の方が楽そうだから女になりたい」というような内容のことが話されていましたが、近年、マイノリティ当事者の発信も増え、社会や学校現場でも性の多様性に関する理解が進んできています。多目的トイレを増やしたり、制服を選択制にしたり、個別で対応する学校も出てきています。その状況の中、本人も性的な違和感を口にしやすくなっていることも考えられます。「自分はおかしいのではないか」という悩みから「体に違和感がある」「気持ちと身体とは違う」などに

変化してきています。最近ではセクシャルマイノリティやLGBTQという言葉もきかれるようになり一般的にも理解がされ始めているように感じますが、成長期の子どもが自分の体や心に対する違和感を正しく理解して口に出すには勇気がいります。残念ながらまだまだ差別の対象となりやすい状況があります。多様性を認め合い、性に括られることなく生きていけるように、人権の問題も含めた性教育が実施されることを望みます。

1 10年間のデータより

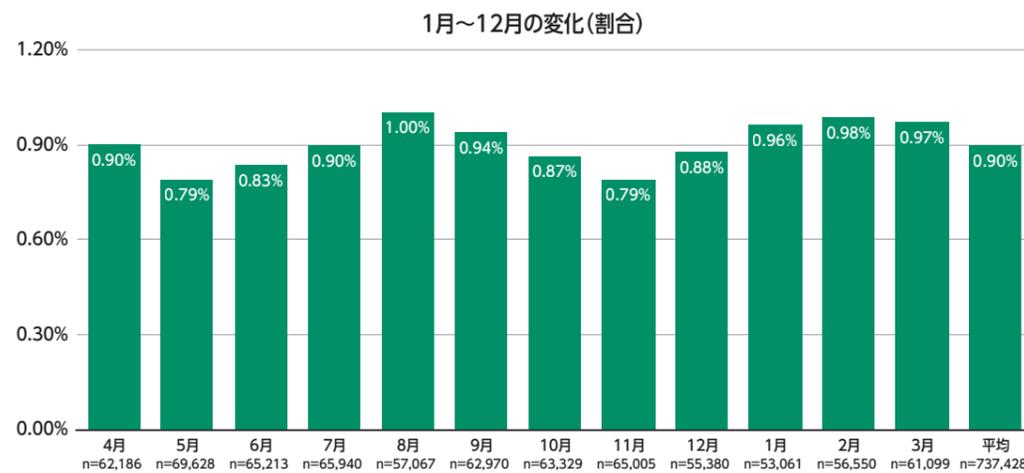
年度別



チャイルドライン全体の着信数が減少傾向にある中、希死念慮に関しては2009年度当初から一定数入ってきています。2015年8月に内閣府から9月1日に子どもの自殺が増えるという発表がありましたが、その影響を受けてなのか、2015年は件数が増えています。2016年度にデータ集計方法を見直したことで2017年度にいったん減少しているように見えますが、2018年度には1,000件を超えて全体の割合の2%近くになっています。この記事を書いている2021年3月には

2020年の小中高生の自殺者数が過去最多(499人)だったと発表されました(警察庁のまとめより)。COVID-19の感染拡大の影響を一番最初に受けたのは子どもたちではなかったのでしょうか。全国一斉に休校という措置が取られ、子どもたちの中には様々な不安や戸惑いがあったと考えられます。その影響が今後どのように表れてくるのか注意深く見ていかなくてはなりません。

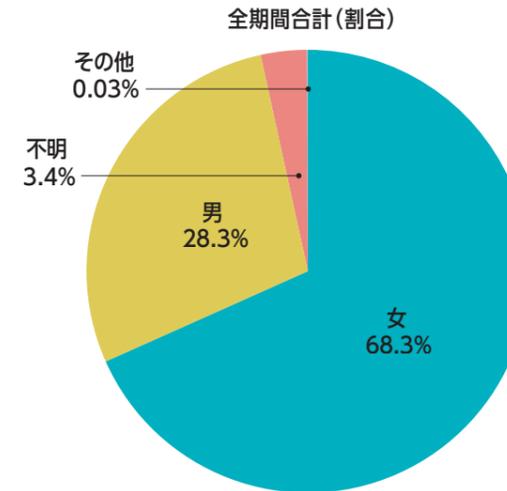
月別



希死念慮を持つ子どもたちの背景にはどんなものがあるのでしょうか。累計の月別で見ると夏休みと夏休み明けの8月、9月に山があります。その他に3学期の始まる1月から4月にかけて多くなっているのは進路決定、卒業、進級に向けての

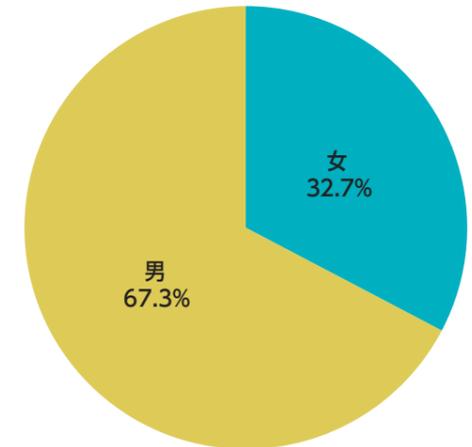
ストレスがあると考えられます。12月に割合が減っているのは学校が休みになること、クリスマスやお正月といった楽しい行事があることなどが要因と考えられます。

性別



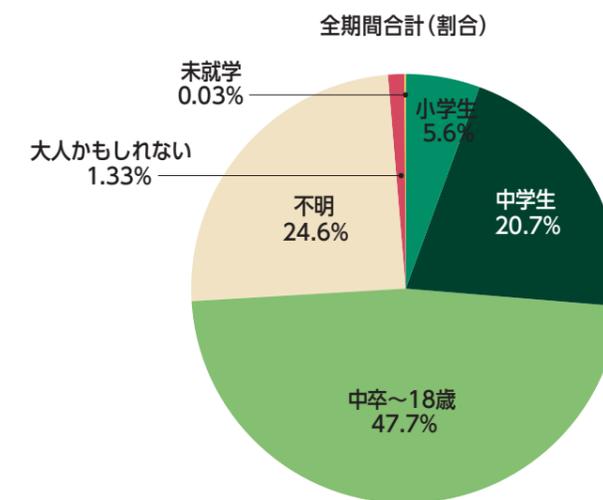
男女別の割合を見ると女子が68.3%と男子の28.3%の約2.5倍になっています。一方、2019年に出された厚生労働省の自殺対策白書では2009年から2018年までの15歳～19歳の自殺者は男子3,245人、女子1,576人となっており、男子は女子の約2倍です。女子は「死にたい気持ち」を言語化でき、誰かに話すことで行動に移さずに済んでいると考

厚生労働省「自殺対策白書」の自殺者 性別 2009年～2018年までの15歳～19歳(割合)



えられるのではないのでしょうか。逆に男子は相談もできず、一人で問題を抱え自死に至るのではないかと推察できます。「男は強くあれ」という日本の根強いジェンダーにまつわる文化の問題が関わっているのではないかと考えられます。古い男尊女卑の考えから抜け出すためにも、人権、多様性などを含む包括的な性教育を実施する必要があります。

年齢別



年齢別では高校生年代が47.7%と約半数を占めています。高校生年代は進学や就職など人生の大きな選択をしなければならない時期です。将来に向けて「何がしたいのか」「何ができるのか」と自分と向き合う時に、「生きていても意味がな

い」「自分が生きていても人に迷惑をかけるだけだ」と話す子どもが多いと感じます。自己肯定感の低い日本の子どもたちの問題が「希死念慮」に大きく関わっているのではないかと考えます。

2 社会情勢との関係

日本全体の自殺者数が1998年に急増し年間3万人を超えました。その後、様々な自殺防止の取り組みがされ2010年以降、全体数は減少しています。しかし、10代に関しては増加しており、特に女性は10代以外の年代でも増えています。(2019年厚生労働省の自殺対策白書より)

9月1日に子どもの自殺が増えることがマスコミでも盛んに報道がされ、そのことで子どもたちも「自殺」という言葉を

見聞きする機会が増えました。もともと「死にたい」という気持ちを抱えていた子が更に「死」に寄っていくことも考えられます。報道に関してはWHOでガイドラインが設けられていますが、どんな方法で亡くなったかが詳しく伝えられたり、SNSで拡散されたりする現状があります。自殺防止の観点からも最小限の情報とともに、自殺防止のために相談窓口と一緒に伝える必要があります。

3 データに見る感想や提言

私たちが注目しなくてはならないのは、毎月平均50件以上の「死にたい」という気持ちを話す子どもがいて、穏やかではありませんが、その数が増えてきているという事です。

子どもはある日突然「死のう」と思って行動に移すわけではありません。学校での人間関係や成績の問題、家庭の貧困や虐待などがその子自身のパーソナリティと絡み合い、疲れや辛さ、苦しさや悲しさなど、様々な感情が積み重なって日々を過ごしています。そこにトリガーとなる何らかの出来事が働いて自死に至るのではないのでしょうか。チャイルドラインにアクセスした「動機」を見てみると「誰かとつながりたい」の割合が他の項目よりも少し高くなっています。チャイルドラインに希死念慮を話す子どもたちは、死にたい気持ちや自身自身を傷つけてしまうというネガティブな感情や行動も、否定されず吐き出せる「誰か」とつながることを求めているのだと

思います。そんな風に思ってしまう自分を理解してほしいという事ではないでしょうか。「死にたい」と始まった電話やチャットが終わるころには言葉に元気が戻り「ありがとう」と終えていくことも多いのです。一人でグルグルと「死にたい」「消えたい」という気持ちと向き合うことはその言葉に捕らわれ抜け出せなくなる可能性があります。子どもを孤独にしないためにも、丸ごとのその子の気持ちを受けとめる必要があります。そして何より、子どもが信頼して話を聴いてもらおうと思える大人の存在が必要です。そういう意味でチャイルドラインの実施団体が地域で活動し、子どもの近くにいる大人に向けて発信をしていくことは重要な役割です。言葉で表現することで踏みとどまる事ができているからそれでいいとするのではなく、子どもがどんな気持ちを持っていても安心して生きていける社会にしていかななくてはなりません。

座談会

「フリーダイヤル10年のデータから見た子どもたち」～内田良さんを迎えて～

内田 良 名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授、博士（教育学）

須永祐慈 ツナガルラボ

竹村 浩 チャイルドライン支援センター代表理事

田野浩美 チャイルドライン支援センター常務理事

高橋弘恵 チャイルドライン支援センター理事

中村 尊 チャイルドライン支援センター理事

田野：内田さん、座談会にお越しいただきありがとうございます。

今回は、チャイルドラインの10年間のデータについて専門家としてのご意見を伺いたと思います。よろしくをお願いします。

内田：こちらこそよろしくお願いします。

田野：たくさんデータをどのように見ていけばいいのかというあたりもご意見をいただければと思っています。

竹村：チャイルドラインは2000年から始まり、2009年から全国共通のフリーダイヤルで受信するようになりました。その時から2019年3月までの10年間のデータについて今回は分析をすることになりました。子どもたちの声を社会へ発信をすることが役割だと思っています。10年という大きな括りで、社会的に報道された事件やトピックスとデータを見合わせて符合することはないだろうか、何か言えることはないかというところを探っていきたいです。

虐待

田野：10年前は虐待という観念が子どもになかったように思います。最近は親から言われることに問題意識を持つようになったかなと感じています。

内田：虐待は電話の中では何パーセントぐらいですか？

田野：1～2%です。

内田：すごく少ない気がしますね。

竹村：社会問題としての虐待の捉え方にも変化があるような気がします。子ども自身の認識の薄さを田野さんが言っていましたが、虐待はいろんな影響でこの10年で増えてきているという感じがします。

子どもが虐待という言葉を使わなくても、その状態は虐待なんだとこちらが認識するというのが、近年は広がっているんです。社会問題として捉えたり、権利侵害として捉えたりしていくというのはかなり最近になってという感じがしています。

中村：そもそも虐待の話は電話しにくい。親に電話を聞かれるかもしれないと思うと、虐待があっても言いづらい。電話とチャットを比べると、チャットの方が虐待の割合は高くなります。

内田：虐待に限らず、家庭の悩みはなかなか電話では言いにくい。それがチャットだと言いやすいのだとすればすごい知見だなと思います。それは大人でもそうですね。電話だと声がかつちやいますもんね。だから匿名性が高いほど言いやすくなるというのは当然あります。すごく興味深いです。匿名性の高さにこそチャットの意義がある。

中村：虐待被害が報道される事件は3歳とか5歳とか低年齢が多いですが、その子たちはチャイルドラインに相談することはできません。チャイルドラインの会話の中では、リアルな虐待を受けている話もあれば、小さい時の虐待がトラウマになり心が病んでいるという話もあります。

竹村：特に性虐待は誰にも話せず被害が長期間になっている場合が多い。被害を話せるようになったのが中学生とか高校生だけれども、始まったのが小学校からということがあります。

内田：チャイルドラインっていうのは、まさに思春期というか、悩みを抱えて誰にも相談できない時の助け舟になっているように思います。心強い存在です。

希死念慮

高橋：内閣府から「9月1日問題」*が2015年8月に発表され、学校が始まることが子どもにとって大きなストレスになっていることが認知され始めました。

チャイルドラインでも2016年の9月に「消えたい」「死にたい」という声が増えていました。2015年の発表を受けて様々な取り組みがあって、子どもが言いやすくなったのかもしれない。

(※内閣府2015年8月「自殺対策白書」より。1972年～2013年の18歳以下の子どもの自殺は9月1日が平均の2.6倍と発表)

内田：「9月1日問題」というのは明らかに学校に特化した課題ですので、学校に絞ったときにどういうデータが出るのか気になりますね。

竹村：電話では、希死念慮と自傷行為は女子が圧倒的に多いんです。

高橋：チャットもそうですね。

内田：いじめによる自死や学校関係の自死の男女比はどうなっていますか？

竹村：そちらは男子が多いです。

須永：不登校や引きこもりの傾向、いじめによる自死は男子の方が多いイメージがありますね。

内田：どうしてこんなに違うんでしょう？

高橋：話せるか話せないかの違いではないでしょうか。

須永：実際に死亡した件数と、希死念慮とでは、男女比に違いがあります。

中村：もしかしたら、話すことがストッパーになっているのかもしれない。

内田：相談できない男性像が見えてきますね。

こんなに女子の方が相談していることに驚きました。

田野：2020年の厚生労働省自殺統計のデータでは、女子の自死が増加しました*。休校になり話す機会が減ってしまったことが原因ではないかと私は考えています。(※2020年女性の自殺者は7,026人(前年比935人増)、男性は14,055人(前年比23人減)。19歳以下女性は777人(前年比17.9%増)だった)

内田：女子の方が言語化して解消していくようなところをチャイルドラインのみなさんは感じているのでしょうか。一方男子は抱え込んでいるという問題点が見えてきますね。

内田：電話では「この子は大丈夫だな」って子と、「本当にこれは危機的だ」という子、そういう違いって感覚的にはあるのでしょうか？

田野：その子の気持ちを一所懸命探っていきますが、そこに入れてくれない子がいます。「死にたいんだよね」とか「生きていても意味がないよね」ということだけをずっと言い続けて、どうしてそう思うかをきいても「そんなときかかれてもしゃべりたくない」とシャットアウトする子は心配になります。

内田：気持ちをつかみにくい子どももいるんですね。ともするといとも簡単に死を選びそうな…

田野：本当は何かがあるのだろうと思うのですが、そこになかなかとどり着けない。たまにそういう子に出会うと、気になります。「死にたい」と言いつつも、話していくうちに泣いているいろいろなことが怒りになったり、変化していきつたりすると気持ちがつかみやすくなります。

内田：確かに変化があると、怒ろうが泣こうがつながっている感がありますね。

高橋：シャットアウトしている子は一方的に電話を切っちゃうこともあります。「どうせ無理」と。そうは言ってもこちらにアピールしているので、それはそれで怒りの感情を出せる力ともいえます。

内田：この子本当に危機的だ、できれば頻繁にでも確認したいなど思えるぐらいに、まずいなんていうケースってどれくらいあるものなんですか？

田野：滅多にないと思います。滅多にないから覚えてい

て、そういう会話はなかなか記憶から消えないですね。

高橋：次の日とりあえず新聞見てみる。載っているわけではないけど。でも、その子の人生はその子のものなので、引き受けてしまわないように受け手*は気を付けているのと、チャイルドラインのシステムとしては受け手だけがダメージを抱え込まないように支え手*がいます。

支え手は、心配を抱えそうな受け手に対してちょっと客観的なところから、「どこが問題だったんだろう」とか「どういう気持ちだったんだろうね」と話して、受け手の気持ちが落ち着いてから帰ってもらうことはします。

(※受け手：子どもからの電話を受ける人)

支え手：受け手に寄り添い支える人)

聴くこと：チャイルドラインの仕組み

内田：希死念慮に限らず、きくのがしんどい話というのはいくらでもありますね。

高橋：電話は特に耳元へ声でダイレクトに感情が入ってくるので、しんどいですよね。

内田：やっぱりチャットよりも電話の方がしんどいんですか？

高橋：生声できくということは、本やニュースできいている子どもの大変さを、子どもの声で語られるので、やっぱりショックが違う感じです。

内田：一方、子どもは相談の内容、特に性的な内容とかになると電話とチャットのどちらが話しやすいのでしょうか？

高橋：性的な悩みは書く自分で読んじゃうのが辛いだろうから、電話の方が楽だと思います。

竹村：卑猥なことも電話の方が多いです。

内田：卑猥なことは文字に起こしにくいっていうことがあって、あとに残るのって嫌ですよね。それぞれ特性があるんですね。単にツールの違いでしか話してなかったんですけど、受け手あるいは話し手のしんどさ、それが非常に興味深いですね。

受け手の人はしんどい立場ですが、感情移入してしまうものなのでしょうか。私はいろんな悲しい事案に出会うことがあると、元々涙もろいのですぐに泣いちゃうんですよ。そのあたり、受け手のみなさんはどのようにやっているのかって純粋に気になってきました。

高橋：そこは研修で学んでもらいます。語られることは子どもの問題であって、それを引き受けることではないっていうのは結構しつこく言っています。

中村：それでも、泣いちゃう受け手さんもいます。

田野：子どもによっては、そこまでそばに来てくれる人が必要なときもあると思うので、私は受け手の気持ちがあんなに泣くほど動くのはかまわないと思っています。一緒に感情を盛り上げてくれないとすごく不満を示す子どももたまにいますね。

竹村：ただ、危ないのは自分で勝手に自分の体験と重ねている場合。

高橋：「なんで泣けたんだろうね」というところはちゃんと振り返った方がいいよと伝えます。自分の体験が蘇ってきて泣けてしかたないのか、「この子可哀そう」って思ったときに、その視点は上からの目線ではないのかなとか…

竹村：自分の体験の場合が多いですよ。

内田：そういうことをあとからやるんですね？

高橋：子どもとの話が終わってからやります。

内田：やっぱり専門家。もし私が当事者に感情移入して泣いて、その後に感情を整理されたら困惑してしまう。でもそこを専門性を高めるために、ちゃんと振り返るわけですね。

中村：例えば「死にたい」という電話を受けたときに、死なれたら嫌という受け手個人の感情が出てしまう。その子の死にたいっていう気持ちとか辛さとかに寄り添うよりも、「うわー、電話を取ったこの子が死んだら私どうしよう」という自分のなかに湧き上がる感情で、焦って言葉が多くなるっていう時があります。そういう時は支え手が受け手を支えています。

内田：やっぱり支え手は必要ですね。

高橋：支え手は受け手の電話が終わってすぐはちゃんと労うんですよ。「泣けたね」とか、「つらいね」とか。

そして、その後、「なんでだったんだろうね」と。

内田：そう思うと、支え手はキャリアがないと難しい。

田野：まあ、支え手もそれなりに受け手の時に失敗しているから分かるっていうのもあるんですよ。

高橋：こう言われたら嫌だろうな、というのも経験しているから伝え方も工夫しています。

竹村：臨床心理士だと両方できるのかもしれないけど、

受け手は気持ちを受けることに専念するのが役割ということがあると思います。支え手は自分が実際受けていないわけだから、ある意味客観的にスーパーバイズできたりとか、「これはどうなんだ」って判断をしたりとか。役割を分けているといえます。

内田：最初からこの仕組みだったんですか？

田野：そうです。

内田：5年、10年経験するなかでできたのかと思いました。本当によくできている仕組みです。

最初は誰もが普通のただの素人ですもんね。専門家として入ってくるわけじゃなくて… そんな素人をしっかりとみんな支えあう仕組みになっているんですね。非常に興味深いです。

いじめ

中村：10年間で、いじめの件数は微減しています。チャイルドラインの電話自体も減っていますが、その中でいじめも減ってきている。いじめの認知件数は社会的に年々増加していますが、チャイルドラインにかかるいじめの件数が減っているということはどういうことなのかということを考えてと思います。

件数が減っていますが、実は減少傾向にあるのは女子で男子の件数はあまり変わっていませんでした。

いじめデータを見ると、2014年度から「いじめ」の件数自体は減っているけれど、発生場所が「インターネット」は増えています。

内田：いじめの電話相談の件数が減っているんですか？ それ、とても興味深いです。

小中高の文科省の統計でいじめの件数が小学校で格段に増えていて、高校も増えています。文科省の統計というのは認知件数ですよ。みんなが調査しようと思えば件数はガンガン増えていく。いじめの件数がもし10年前の2倍、3倍になっていたら、学校は地獄ですよ。でもたぶん、そうはなってない。中村さんのお話だと、学校におけるいじめのしんどさって10年前も20年前もそんなに変わらずずっと一定数であったということですよ。それを学校が一所懸命拾い上げるようになって

きたことで認知件数が増えている。これは、いじめが増えたのではなく、本当の実態と認知件数の間にあつたずれがなくなってきたということなのかな。

私は本当の実態っていうのは分からないって20年前にあきらめていたんです。唯一分かるかもしれないといわれているのが被害者調査。でも、そんなことなかなかできないわけですよ。なので、実態が全然分かっていませんでした。でも、よく考えたら電話相談っていう窓口があるっていうことに今気づいて、とても驚いています。20年前にあきらめたものが、今見えてきたので。

もし件数が減っているんだとすれば、学校側が認知件数を考えるようになりいじめを拾い上げたこと、また、チャイルドラインも含めてみんなが子どもの声をきこうと認知を高めていったことによって、子どもたちがいじめの被害、苦しさが少しずつ減っているかもしれないというふうにポジティブにも評価できる数字だと思います。

実際の数字はどうなっていますか？

中村：チャイルドラインの発信件数自体も年々減ってきているのですが、いじめを主訴とする割合を見ると、2009年度・2010年度は、5.5%・4.6%、集計方式が変わった2011年度の7.1%を最高に、緩やかに割合が低くなっています。

内田：大津の事件もあって2011年度は、みんな電話しやすかった状況はあるかもしれないですね。それにしても驚きました。

電話の件数全体が減っているということですが、何で減ったんですか？

田野：固定電話が減っているというのが大きい。親が携帯電話を持っているので、子どもが自由にかけられる電話が減っているということと、公衆電話も減っています。このことは、小さい子どもには特に影響があります。

内田：いろんな条件を考慮したところで、いじめが急増はしてない、一定数あるっていう、ずっと変わってないぐらいの感じですよ。このことは、あまりマスコミ受けはしないんですけど、私にとってはすごいデータです。

田野：電話を受ける側としても、増えているという感覚は本当はないですね。

須永：いじめの件数を男女別で見ると10年の前半部分は女子が多く、後半は男子が多くなっています。

内田：ああ、すごい。高校生は10年ぐらい前から携帯を持ち始めても件数が変わってない。小学生は固定電話の影響ですね。固定電話が無くなった、小学生が電話できない、だから件数が減る。高校生は10年ぐらい前から携帯を持っている、だから電話件数はそんなに減らない、ちょっと増えているぐらいかもしれないです。中高生は10年間ずっと一定の割合で苦しんでいるということですね。

小学生の減少は、ツールの問題かもしれないので素朴には喜べないですよ。あまり変わってないから、これもあまりいい話ではありません。これだけ認知をして一所懸命頑張ってきたけど、まだまだ一定数苦しい子どもたちがいるという… だからこそもっと認知を高めないといけないし、電話相談も充実させなきゃいけないって結論になりますよね。すごいな、大発見ですよ。非常に学術的な意義が高い。これまで見てきたいろんなデータの中でも特に高いです。いじめの実態はみんな分からないものだってあきらめていたので、「いじめは認知件数、以上」それで終わりみたいでした。

虐待も一緒なんですよ。虐待も通報したかしないかの違いであって、当事者の調査なんてできないですから。でも、こんな形で、自分で電話してくるってポイントがあったんですね。

田野：電話を受ける側からは、「いじめ」をいろんなところに話している子どもが電話してくるような気がします。以前より、大人にしゃべれる子どもが増えているように思います。

高橋：先生にいじめられていることを言えていますね。

内田：それだと認知件数の高まりと重なりますよ。

高橋：ただ、先生がうまく対応してくれないという話もあるんです。

内田：認知件数は高まっている、つまり、先生には言えていて、先生自身がキャッチするようになっている。ただ、苦しみそのものは全然減ってない… すごく現実が見えてきているように思います。

中村：要するに、認知したあとの対策はまだ取れてないってことですね。

内田：結論はそういうことでしょうか。学校の閉鎖性そのものを変えないと、もはや先生がいくら頑張ったところ

で、30何人の学級で1年間暮らしていると息が詰まっちゃうんじゃないかなという気はしますけどね。

改めて、子どもの声が直接チャイルドラインに届いているってことですね。だからこそ、本当に増えているか減っているかも数字で分かるわけだし、子どもの声がダイレクトにきてるってすごいことなんですよ。20年前はチャイルドラインには一部の人のしか知られていなかったでしょう。それでも、カードを根気よく学校に配り続け、ネットワークを拡げることで、多くの子どもたちが電話をかける機会をある程度手にしました。だから今堂々とこれが本当の実態だともいえるし、全国の声のある程度は偏りなく拾っているんだということがいえます。バイアスがかかってないということだと思うんですよ。全国津々浦々にカードをまいて、子どもたちが電話をかけるチャンスがある中での数字なんだっていうこと。

まだまだ普及活動は必要ですけども、このデータは、全国の子どもの声を偏りなく拾い集めている、非常に意義が大きいデータだということです。なんか大変な話になってきました。

須永：私は今回、この10年データを集計してきましたが、このデータが価値をもってくるということを感じてきていました。同時に、どういう形でこれを活かすのかっていうのは、非常に慎重にならないといけないとも思っています。

今回、内田さんにつながる前にみなさんに、このデータは安易に出しすぎるとひとり歩きする可能性があるので、扱い方は大事にしなければいけないということを共有させていただきました。

内田：おっしゃるとおりです。

ネットトラブル

中村：2009年から2015年度まで、会話成立中の割合は1%以下でした。また、集計方法を変えた2016年度からは、1%以上となっています。件数で見てもネットトラブルは増えています。会話の中の関係性では、「友人・知人」が2016年に前年比の60%近く増加しています。この頃からネットいじめとかLINE外しが起こって

いるのではないかと推測しています。もうひとつ、関係性の中で「その他・知らない人」という項目に特徴的に現れていることがあります。小学生年代、中学生年代の「その他・知らない人」は2017年ぐらいまで増えている。トラブルの対象が「知らない人」になっているということですね。高校生年代になると「その他・知らない人」が2016年から毎年増加していて、2018年には2016年の3倍に達しています。年齢が高くなるとネットの中でのトラブルの相手が「その他・知らない人」になっている傾向が見てとれると思います。

「ネットトラブル」をデータ全体と比較すると、電話そのものの件数は男子の方が多けれど、ネットトラブルは女子の方が多いという性別による違いがあります。

関係性の「知らない人」というのは、データ全体では0.8%なんですけど、「ネットトラブル」では18～19パーセント。いかに子どもたちがネットで知らない人とつながってトラブっているかということができています。

動機もチャイルドラインでは「聴いてほしい」、「つながってほしい」が高いですが、「ネットトラブル」に関しては「何かの助言がほしい」とか、気持ちでは「困っている」が高いとか、解決したい部分が多くあるように思います。

中村：また社会情勢との比較ですが、2015年にオンラインゲームの売り上げが増加しています。今のネットゲームはオンラインだとボイスチャットでコミュニケーションできるようになっていて、ゲームに親和性のある子どもたちの主流はそちらへ移行しているように思いますね。

ネットでつながって、ゲームでつながって、知らないけれどもつながっている人に話をしているんじゃないかなというところを深く検証してみる価値はあるかもれません。

「ネットトラブル」が全体の0.1%台だった頃は、アダルトサイトやそれに伴う架空請求などでした。でも、近年ではLINE外し・ネットいじめ・リベンジポルノなど多岐にわたってきていて、そのことが女子が多いということもつながると思っています。

また、ネット上で知り合った知らない人に相談を持ち掛け、結果問題が大きくなっている… 座間の事件のようなことが起こってしまうのではないのでしょうか。

内田：そもそも、ネットトラブルは女性が多いものなの

でしょうか？

須永：これは今回のデータ集計外の別の調査データの話になりますが、男子はネットゲーム上でのトラブルが多かったりします。でも、女子、特に中高生は、LINEなどでグループを作って文字でのコミュニケーションが非常に高くなってきます。使用頻度が多くなってくるとよって、ちょっとしたトラブルがネットトラブルとして起こってしまうことは、傾向として感じることで。

内田：ネット関係の調査もいくつか地域を限定したものも含めていろいろあると思うんですが、チャイルドラインには結局すべての子どもの悩みが集まっているところがミソで、このネットトラブルの男女比と、学校のリアルトラブルの男女比を出してみたりとか、それによっていかにネットで女子が巻き込まれていたりとか、そういうふうなことをやるともったいいかもしれないですね。

性の多様性

高橋：2011年から2016年までは「性の多様性」っていうカテゴリでデータを取っていたのですが、2016年のからは「性」という括りの中に「性の多様性」という項目でデータを取るようになりました。

ここ最近の2018年度以降を見ていると、電話は少し減ってきている中で、性の多様性に関しては横ばいになっています。中学生は増えている感じがあります。

最近学校で制服が選べるようになって、更衣室が配慮されたり、セクシャルマイノリティについても、性教育をやる学校では言葉として入ってきているので、口に出しやすくなったように感じています。性別は男子が圧倒的に多いんですが、2016年あたりでちょっと減り、その後一定件数かかってきています。また、ここでも女子の方は増えてきています。

チャットや「つぶやく」*では、女子が性的な違和感を発信できるようになっているように思えます。

(※チャイルドライン支援センターホームページに、子どもが自分の気持ちを吐き出す場として「つぶやく」を2021年6月に開設しました。)

内田：どういうことなんですか？ その件数の変化とか

も…とても興味深いですね。セクシャルマイノリティの話をよくきくようになったのはこの2、3年ですかね。何かきっかけはあったのでしょうか。

高橋：2005年から2010年頃にマイノリティの人たちがマスコミに多く出てきています。風俗関係でゲイバーとかショウパブの人たちがクローズアップされたりということが2000年の前半頃ありました。このデータを取る前からそういう背景があったので、初めから性の多様性については入ってきていました。

田野：2000年初期の頃は男子が女性の恰好をしたという話が多かったですね。

高橋：最初の頃は、男性で生きていることが大変で、「女は楽でいい」というような発言や、「女はいいよな」「女になりたい」などと言っている子がいましたが、今そういうことを言う子たちはあまりいないと思います。性のことを話さなかでは、体と気持ちの違和感みたいなところを話すことに変わってきていると思います。

内田：性の違和感を女子がよくしゃべるようになってきたということですか？ 全体的にカミングアウトしやすくなってきていますが、男子の方が先行していたということですか？ そういうことがデータでいえるといいですね。男女比の違いとか。本当に最近ですよ、性的マイノリティのことがしっかりと論じられるようになってきたのは。男女のうちどっちがしゃべりやすいのか、また、もしそこに変化が見られるとしたら、ジェンダー研究者にとってみて素朴に興味深いことだと思います。

高橋：性の多様性に関しては、生物学的にどちらの性かということでデータを取りますが、自分の性別を言いたくない子もいます。なので、チャットは書き込みの最初のところで年齢と性別を任意でできているのですが、書いていない子たちがいます。

テレビには、女性になりたい男性が多く出ていましたが、最近は逆も見えるようになってきたので、女性として生まれてきた子たちが言いやすくなったのかと。そこは感じますね。

内田：性的な話題って被害は別として、性をオープンに語るのは常に男性だったけれど、女性の性自体が被害も含めて語られ始めるということなのかもしれないですね。

高橋：そうですね。たぶんそれがこの2019、2020年。

この1、2年のところで「レインボーパレード」や「Me Too運動」「パートナーシップ制度」などが盛り上がったので、声が上げやすくなってきたという感じでしょうか。

内田：そうか。これはすごい知見ですね。

高橋：女子の場合は性被害などで性志向が変わっていく部分があったり、男性恐怖になったりとか変化することがあります。そういう意味では「Me Too運動」は結構大きかったかもしれないですね。

内田：私もジェンダー関係の議論とか参照することが多いのですが、膨大な量の議論や言説に比べると、意外と数字がないんですよね。政府とか団体が出している数字はいろいろありますが、研究レベルだと逆に数字がなくて、どちらかという、アイデンティティですごく哲学的な話になったりとか…

例えば、芸能人のカミングアウトする人数がどう変わったかというのはあるんですが、本人の声でこれ分かるっていうのはすごいですね。たぶん、誰もこういった「女性の方が言いやすくなった」という統計は持ってないんじゃないかと思います。

高橋：全体における「性の多様性」の割合を年度毎に見てみると、18年度はちょっと減ったんですが、それ以降、現在も増えてきている印象があります。

とはいえ、まだまだ一般的に理解が進んでいなくて親に傷つけられたり、「気持ち悪い」とか言葉で言われたりする子どもの声も入ってきています。なので、理解をもっと広げていかなければいけないんだということが、このカテゴリーではいえると思います。

総論

中村：10年間の流れで見ると、発信も着信も減っていますが、そのなかでテーマによって、10年間の流れ、変化は違ってきます。例えば、いじめの割合は微減ですが、ネットトラブルの割合は増えています。

月別を累計した会話成立件数は今回グラフとして紹介できませんでしたが、全体では、5月から7月・9月から11月に多い傾向で、性別にすると、女性が全体と同じ傾向、男性は12月にも多い傾向にあります。男女共

8月の夏休みに会話成立が減っていますが、男性は女性と違い1月から3月も多い傾向と違いがありました。「年齢別」で見ると、どの年代も5月から7月が多くなっていますが、小中学生は11月が一番多いです。

「関係性」（誰のことについて話しているか）の月別累計を見ると、「自分自信」については5月がやや多く、12月から2月にやや下がります。「友人・知人」では、5月から7月、9月から11月と件数が多く、8月と11月が特に少なくなっています。「教師や指導者」については、友人・知人と月の件数の多い少ない傾向はほぼ同じですが、9月から11月、特に10月に多い傾向がありました。「両親」については、5月、8月、9月とやや多いですが、増減は他と比べてなだらかで、1月にやや少なくなっていました。

高橋：長期休みと親との関係は何かありそうですね。

中村：この関係性によって多い月が違ふことがどういう意味なのか見ていくといいように思います。

例えば「友人・知人」を見てみると、1学期は人間関係を手探りするようなところがあったり、2学期には序列が決まってしまうと、トラブルが増加することがあるのかなという気がしますね。

高橋：学校が始まって探りさぐりで友だちできなかったとか、ゴールデンウィークに緊張が切れて気持ちが落ち込んだり揺れたりして、学校再開したら友人関係の問題が出始めることが考えられますね。

内田：「友人・知人」が11月に増えるというのが非常に興味深い。そんな説を言っている人は誰もいないので、今どうということだろうと考えていました。「友人・知人」関係で11月に何がおきるのかってことですね。

高橋：11月のイメージは学校行事。運動会、文化祭、発表会的なことや部活の大会とかも。行事が多い月というイメージがありますね。

須永：実は日別のデータも出しているのですが、11月3日は文化の日ですね。ここに文化関係の行事をする学校が全国的に多いと仮定すると、11月に友人知人関係の悩みが多くなることは考えられるように思います。また、11月に限らず文化祭の前後、あるいは合唱コンクール等の前後というものも注目して考えてもいいかもしれません。

なので、学校行事、特別行事に起因した通常とは別の関係性が動き、そのときに発生するトラブルが「友人・知人」に起こっている。そのなかで「自分自身」に対するモヤモヤ・悩みみたいなものも増加している。それが大きくなると「教師」との関係性にも影響が及ぶ可能性というのは、ひとつの仮説かなと思います。

内田：もし、11月に秋の行事でトラブルがおきているんだとしたら、これはすごい発見。

高橋：これ新型コロナ拡大の時期と比べてみるとわかるかもしれません。行事がなくなっているのです。

内田：行事があるときとないときの差ということですね。確かに、行事の話題はすごくありますよね？

高橋：ある。部活についても多いですね。

内田：やっぱり集団ですね。教室そのものが非常に密度が濃くて、そのうえになぜか集団の凝集性を高めるという目的で学校行事が設定されてるんですね。集団性を学ぶのであれば学級集団があるだけでも十分だと私は思うんですが、そこに余計な学校行事が入ってきて、そこで子どもたちが苦しんでいるということが、少しも言えるといいですね。なんか言えそうな気がしてきましたね。

高橋：データについては今後も分析して発表していきたいと考えています。

内田：それがいいですね。今回もとても興味深いデータがたくさんありました。本当に、どうしたらいいんだろうっていうぐらい。

内田：話は尽きませんが、今回はこれで終わりにしたいと思います。内田さん、ありがとうございました。

声をつないでいく



内田 良
名古屋大学大学院
教育発達科学研究科准教授、
博士（教育学）

この報告書は、電話をかけてきた子どもたちの「声」でつくられています。10年間で73万7千428件。想像を絶するような件数です。日本は豊かで安全な国であると言われてはいますが、それでも約73万件の痛みがこの社会のどこかに存在してきたのです。

チャイルドラインの電話相談やチャット相談に寄せられた73万件の声は、子どもの安心・安全を構築していくうえで、きわめて重要な意味をもっています。それはたんに件数が多いからだけではなく、それが子どもの生活全体の声を拾い上げているからです。

子どもの日常生活の全体を対象にして苦悩の声を集める作業は、決して容易ではありません。なぜなら子どもの日常生活に、私たち大人は縦割りで対応してきたからです。

子どもは普段、家庭と学校の間を行き来しながら時間を過ごしています。ところが、たとえば学校のことは文部科学省が、家庭のことは厚生労働省が管轄しています。学校／家庭＝文部科学省／厚生労働省＝教育学／社会福祉…といったように、縦割りで整理されます。

私自身、「教育学」の領域に身を置いていると、まるで家庭や社会福祉は別世界であるかのように、研究のテーマとしても研究者のネットワークとしても、接点がほとんどありません。だから、「教育学」の研究者は、学校で子どもの身に何が起きているかは把握していても、家庭で何が起きているかまでは関心が及ばないのです。

子ども自身は、いじめ・不登校・体罰、そして虐待・貧困と、学校や家庭でさまざまな問題に遭遇しながら日々を送っています。でも大人の側が、学校／家庭のどちらかの世界でしか、子どもの問題を感知できていないのです。

チャイルドラインには、学校／家庭の縦割りを超えて、子どもの声が届きます。いまを生きる子どもの生活全体が見えてきます。子どもが生きる生活世界の縮図として、この報告書がもつ意味はとてつもなく大きいのです。

そして報告書には、もう一つ、大事な「声」が記録されています。チャイルドラインを長らく運営し、現場を見てきたスタッフたちの声です。私は今回、座談会の場で、その10年間の蓄積と変容を聞き取りました。

座談会のページで実際の熱気がどこまで伝わるかわかりませんが、私自身は心を落ち着けてスタッフの声を聞き取るというよりは、むしろ鼻息荒くスタッフに質問をするばかりでした。自分でメモをとる余裕がいくらいに、私にとっては新しい発見の連続でした。

じつは鼻息が荒かったのは、私だけではありません。データを見て驚く私の姿を見て、スタッフもまた、「私たちには当たり前のことだったけど、驚くべきことなんだね」と新たな気づきを得ていたようでした。また、私がデータを読み取って解説をすると、ありがたいことに、「いままで見えてなかった」とスタッフ自身の新たな発見につながることもあったようでした。

医療領域でエビデンス（科学的根拠）の意義を説いたことで知られる論者に、現場とエビデンスとの関係性について興味深い指針が記されています。すなわち、これからの医療は、診療で困ったときには、権威（教科書や先輩）ではなくパソコンのほうに振り向くべきであるというのです*。治療の指針は、目の前の医療現場ではなく、たくさんの調査結果が掲載されている論文データベースのなかにあるという発想は、日頃の実践において自分の狭い世界から抜け出ることの重要性を、私たちに教えてくれます。

最後に、子どもの声とスタッフの声が詰まったこの報告書を手にとったいま、私たちは自分が感じたことを「声」にして発していかなければなりません。一つひとつの声はすぐに消えてしまいがちですが、みんなの力を合わせれば、それをつないでいくことができます。子どものいまを守る活動は、これからもつづいていきます。

* Guyatt, Gordon H., 1991, "Evidence-Based Medicine," ACP Journal Club, 114, Mar-April: A-16.

年月	社会情勢子どもに関する【い】いじめ、【自】自殺、【虐】虐待、【ネ】ネットトラブル、【法】法整備関連	流行・話題
2009	Twitter利用者急増(200万人)、貧困ビジネスが出てくる、新型インフルエンザ:パンデミック宣言(日本人死者200人)、ネットカフェ難民、教員免許更新制度開始、裁判員制度開始、オバマ大統領ノーベル平和賞 【法】児童福祉法改正	【流行語】 草食系男子、歴女、便所飯、こども店長、二位じゃだめなんですか?、ファストファッション、スカート男子、ベッコロス 【芸能関係】 レディー・ガガ(バイセクシャルカミングアウト)、マイケルジャクソン急死 【テレビ・映画】 聖☆おにいさん、ツレガウツになりまして。、救命病棟24時、ごくせん、ROOKIES、余命1ヶ月の花嫁 【本】 IQ84、読めそうで読めない間違いやすい漢字 【マンガ】 バクマン、乙嫁語り、 【ゲーム】 ドラゴンクエスト 【スポーツ】 WBC2連覇、イチロー記録ラッシュ
1月	小中学生携帯電話所持規制(いしかわ子ども総合条例) 【い】【自】【ネ】さいたま市立中学校3年女子生徒が「ネットいじめ」を苦に自殺	
2月	【い】【自】北海道千歳市立中学校2年の女子生徒がいじめを苦にして自殺(意識不明の重体)	
3月	【い】【自】三重県伊勢市の高校1年男子生徒が、いじめを訴える遺書を残して自殺 【い】北海道滝川市立中学校1年男子生徒がいじめを苦に自殺(負傷) 【虐】奈良県で5歳の長男が両親に食事を与えられず餓死	
4月	【虐】大阪府西淀川区で小学4年生の女児が同居男性による暴行死	
7月	九州北部大雨水害 【ネ】インターネット上に神戸大学法科大学院の学生を名指しで中傷する書き込みが繰り返されていたことが発覚	
8月	【い】【自】名古屋市中立中学校3年男子生徒が公園で自殺。	
11月	【い】【自】静岡県藤枝市立中学校女子生徒2人が商業施設駐車場から飛び降り自殺 【い】沖縄県うるま市立中学校2年男子生徒が同級生8人から集団暴行を受けて死亡 【虐】兵庫県三田市の5歳児女児が同居する継母により頭部を強く揺さぶられ硬膜下血腫により死亡	
2010	育児休暇促進事業、「はやぶさ」7年ぶり帰還、映画テレビスマホで3D元年、ラジコ始まる(ラジオ番組のインターネット配信)、ipad日本上陸、記録的猛暑、日本航空経営破綻、子ども手当支給開始、東北新幹線が新青森まで延伸	【流行語】 ゲゲゲの～、～なう。、イクメン、いい質問ですね 【芸能関係】 ヘビーローテーション、トイレの神様、ありがとう、K-P OPブーム 【テレビ・映画】 ゲゲゲの女房、mother、モテキ、フリーター家を買う、医龍、借りぐらしのアリエッティ、悪人、告白 【本】 もし高校野球の女子マネージャーがドラッグの「マネジメント」を読んだら、伝える力 【マンガ】 ONE PIECE、間金ウシジマくん、宇宙兄弟、進撃の巨人、のだめカンタービレ 【スポーツ】 サッカーW杯決勝リーグ出場、バンクーバー五輪
1月	【い】埼玉県春日部市立中学校3年の男子生徒が校舎ひさしから転落して負傷	
4月	【虐】大阪府で1歳男児が内臓損傷による出血性ショックで死亡	
5月	【い】名古屋市の私立中学生が別の女子生徒の集団から性的ないじめ被害(携帯電話で撮影)	
6月	【い】【ネ】岐阜県可児市立中学校1年女子を2年生5人が性的いじめ(写真や動画を撮影、転送) 【虐】久留米市で5歳女児が母親からの虐待で死亡	
7月	【い】【自】福岡県太宰府市の私立高校1年男子が部活動でのいじめを訴えるメールを残し自殺未遂 【い】神奈川県横須賀市立小学校で6年女子が同学年女子から障害者用個室トイレで暴行被害 【虐】大阪府西区で3歳と1歳の姉弟が母親のネグレクトにより餓死	
8月	【い】大阪府高槻市立小学校3年の女子がいじめ被害。母親が抗議したところ、嫌がらせ被害 【い】山口市立小学校5年生の男児が担任教師よりバワハラ被害 【虐】杉並区内で3歳女児が里親から虐待死	
10月	【い】滋賀県大津市の中学2年男子がいじめを苦に自宅マンションから飛び降り自殺	
12月	【い】栃木県市立中学校でいじめ被害者の父親が加害生徒を暴行	
2011	東日本大震災、原発安全神話崩壊、SNSで被害状況の把握、反面でデマも拡散、スマホが爆発的に普及、育児休暇促進事業(厚労省)、児童養護施設匿名寄附タイガーマスク、地上デジタル放送完全移行	【流行語】 帰宅難民、スマホ、どや顔、風評被害、なでしこジャパン 【芸能関係】 やさしくなりたい、フライングゲット、マルマルモリモリ 【テレビ・映画】 ACジャパン広告、家政婦のミタ、女王の教室、マルモのおきて、コクリコ坂から、モテキ、八日目の蝉 【本】 人生がとぎめく片付けの魔法、心を整える、下町ロケット 【マンガ】 魔法少女まどか☆マギカ、銀のスプーン、そんな未来はウソである 【ゲーム】 ニンテンドー3DS発売、マリオカート、モンスターハンター、みんなのリズム天国、星のカービィ
1月	【い】札幌市市立中学校の教諭が特定の生徒に暴行、暴言を繰り返し懲戒処分 【い】神奈川県小田原市立中学校でいじめ被害の女子生徒が加害生徒を切りつける 【虐】大阪府で3歳児が両親の猛攻により虐待死 【虐】千葉県柏市、当時2歳児が両親のネグレクトにより餓死	
3月	【い】【自】広島市立小学校の6年女子児童がいじめを苦に自殺 【い】【自】熊本県八代市立中学校の3年男子生徒がいじめを苦に自殺	
8月	【い】【ネ】大分県立高校1年の女子生徒がネット上のいじめを苦しむ	
9月	【い】【自】札幌市立中学校1年の男子生徒が自宅マンションから転落死 【い】鹿児島県出水市立中学校の2年女子生徒がいじめを苦しむ	
10月	【い】【自】滋賀県大津市立中学校の2年男子生徒がいじめを苦しむ。事件前後の学校と教育委員会の隠蔽が発覚し問題視された 【虐】名古屋市中立中学校2年男子生徒が母親と交際相手から暴行死 【い】【ネ】長野県県立高校の2年男子生徒の暴行被害動画がインターネットにアップされる 【い】滋賀県高島市立中学3年男子生徒3人が「悪質ないじめを行った」として逮捕される 【い】【自】富山県射水市立中学校の2年男子生徒が自殺	
2012	やらせ投稿ステマが横行、領土問題浮上、電子書籍広がる、SNS普及、無料ネットソーシャルゲームガチャ課金問題、関越自動車道高速バス居眠り運転事故、スカイツリー完成・開業、九州北部豪雨、マラ・ユスフザイさん襲撃される、黒子のバスケ強迫事件 【法】児童福祉法改正	【流行語】 美魔女、ネトウヨ、ワイルドだろお、LCC、爆弾低気圧、IPS細胞 【芸能関係】 きゃりーぱみゅぱみゅ、女々しくて 【テレビ・映画】 理想の息子、ドクターX、GTO、リーガルハイ、宇宙兄弟、けいおん 【本】 聞か力、体脂肪計タニタの社員食堂、共喰い、13歳のハ
1月	【虐】大阪府東大阪市小学6年女児が母親により刺殺	
3月	【い】和歌山県紀の川市立中学校の2年女子生徒が上級生5人から集団暴行被害	
4月	【い】埼玉県草加市立の中学2年男子生徒が同級生から飛び降りるを強要されて重傷 【虐】東京都江戸川区で、小学4年男子と2年女子の二人が無理心中により殺害される	
5月	【い】【ネ】神奈川県相模原市立中学校の生徒がいじめ動画をネット上で公開	
6月	【い】宮城県仙塩地区の高校1年女子生徒が集団暴行被害	

7月	【い】【自】静岡県浜松市立中学校の2年男子生徒が自殺 【虐】北海道登別市で中学校特別支援学級の女子生徒が同居男性により暴行殺害される	ローワーク 【マンガ】 黒子のバスケ、宇宙兄弟、ハンターハンター 【ゲーム】 どうぶつ森、ワンピース海賊無双 【スポーツ】 ロンドンオリンピック
9月	【い】【ネ】愛知県蒲郡市立中学校の男子生徒が携帯メールで集まった集団によるいじめ被害 【い】大阪府寝屋川市立中学校の3年男子生徒が継続のないいじめや集団暴行を受け負傷	
10月	【い】【自】札幌市立中学校の1年男子生徒が自宅マンションから転落して死亡 【い】兵庫県川西市県立高校2年男子生徒が自殺、教諭が自殺に対して暴言 【い】東京都品川区立中学校の1年男子生徒が自殺 【虐】愛知県豊橋市で4歳女児が両親からのネグレクトにより衰弱死 【い】鳥取県境港市立中学校の3年男子生徒が校舎から飛び降り重傷 【虐】広島県府中市で児童相談所の判断により母親の元に戻っていた小学5年男子児童が母親より暴行死 【い】茨城県水戸市立中学校でいじめ被害の母親が授業中の教室に包丁を持って乗込む	
12月	【い】【自】東京都世田谷区の私立中学校に1年女子生徒が自殺	
2013	DJポリス、PM2.5被害広がる、富士山がユネスコ文化遺産、和食がユネスコの無形文化遺産、無料ダウンロードゲーム流行る、line利用者1億人超え、バクッター投稿逮捕も、誤表示・偽装表示が続々発覚、「はだしのゲン」松江市教育委員会が不適切と通知、中高生約52万人がネット依存のうたがひ、韓国発の女性大統領誕生:朴槿恵、日本TTP参加表明、障害者雇用率引き上げ、西ノ島の海底火山噴火で新潟誕生、黒子のバスケ強迫事件犯人逮捕、餃子の王将社長殺害、エボラ出血熱の流行、 【法】いじめ防止法が国会で成立(6月) 【法】子どもの貧困対策の推進に関する法律	【流行語】 じぇじぇじぇ、倍返しだ!、おもてなし、ブラック企業、今でしょ!、ご当地キャラ、アベノミクス、特定秘密保護法、リベンジボルト、ヘイトスピーチ、pm2.5 【芸能関係】 恋するフォーチュンクッキー 【テレビ・映画】 あまちゃん、半沢直樹、コウノドリ、陽の当たる家~生活保護に支えられて、信長のシェフ、そして父になる、風立ちぬ 【本】 医者に殺されない47の心得、ロスジェネの逆襲 【マンガ】 キングダム、暗殺教室 【ゲーム】 妖怪ウォッチ、モンスターストライク、パズル&ドラゴン、トモダチコレクション 【スポーツ】 大谷翔平2刀流デビュー、田中将大開幕24連覇、イチロー-日米通算4000本安打、嶋茂雄と松井秀喜が国民栄誉賞受賞
1月	【自】大阪市の高校で体罰が原因で自殺	
2月	【い】石川県川北町立中学校の2年男子生徒がいじめを苦しむ加害者生徒を刺傷 【い】香川県綾川町立中学校で外国籍の1年男子生徒が同級生から暴行を受け重傷 大阪府東住吉区で死亡している児童を生きているとして児童手当を詐取	
3月	【い】【自】奈良県橿原市立中学校の1年女子生徒が自殺	
4月	【い】【自】神奈川県湯河原町立中学校で3年男子生徒が自殺 【虐】横浜市で女児が母親と同居男性よりの暴行死 【い】【自】長野県諏訪郡中学3年男子が自殺	
5月	【い】【自】名古屋市中立中学校の2年男子生徒がいじめ被害のメモを残して飛び降り自殺	
7月	【い】【自】栃木市立小学校の教諭が市のアンケートで「いじめがある」と回答した児童に書き直しを迫る	
8月	【い】【自】長崎市立小学校6年女子が自殺を図って意識不明 【虐】和歌山市で2歳男児が父親よりの暴行死 【い】山形県立高校で生徒が校舎から転落して負傷	
10月	【い】【自】【ネ】熊本市内の県立高校1年女子生徒が自殺	
12月	【虐】東京都大田区で生後間もない女児が両親により遺棄 【虐】栃木県芳賀町で当時4カ月の男児が父親により暴行死 【虐】豊橋市で当時7カ月の女児が父親により暴行死	
2014	STAP細胞はなかった騒動、全璧の作曲家佐村河内守の作品が実はゴーストライター作、集団的自衛権の行使容認、都議会ヤジ問題(塩村文香都議にセクハラヤジ)、号泣県議政務活動費不正使用疑惑、ノーベル物理学賞3人受賞、マララさんノーベル平和賞、消費税8%開始、武器輸出禁止三原則撤廃、オバマ大統領来日、メール遠隔操作犯逮捕、AKB切付け事件、児童虐待最多の7万件超 【法】特定秘密保護法施行	【流行語】 ダメよダメダメ、壁ドン、危険ドラッグ、カーブ女子 【芸能関係】 ありのままで、足音 【テレビ・映画】 笑っていいとも終了、妖怪ウォッチ、明日ママがいない、サレント・ブア、死神くん、家族狩り、パパとママが生きる理由、アナと雪の女王、永遠の0、ハリウッド版ゴジラ 【本】 嫌われる勇気、ピリギヤル 【マンガ】 ハイキュー、ダイヤのA、アオハライド 【ゲーム】 スマッシュブザーズ、妖怪ウォッチ 【スポーツ】 ソチ五輪
1月	【い】【自】鹿児島市立中学校の2年女子生徒がいじめ被害により自殺未遂 【い】【自】山形県天童市立中学校の1年女子生徒が自殺。いじめ被害を訴える遺書 【虐】東京都葛飾区で2歳女児が父親により暴行を受ける	
2月	【い】【自】埼玉県鶴ヶ島市立中学校の2年女子生徒がいじめを苦しむ校舎から転落、重傷 【い】【自】広島県三原市の高校1年男子生徒が自殺	
4月	【い】東京都葛飾区立中学校の3年男子生徒が自殺	
7月	【い】【自】青森県立高校の2年女子生徒が自殺	
8月	【い】【自】【ネ】千葉県我孫子市立中学校の1年女子生徒がいじめを苦しむ2度にわたり自殺未遂	
9月	【い】長崎県新上五島町立中学校の3年男子生徒が自殺	
11月	【い】【自】愛媛県愛南町立中学校の2年男子生徒がいじめを苦しむ校舎から転落、重傷 【い】【自】山口県美祢市立小学校の6年男子児童がいじめを苦しむ校舎から転落、重傷 【い】【自】群馬県伊勢崎市立小学校の6年男子児童が自宅マンションから転落死 【い】【自】群馬県伊勢崎市立小学校の6年男子児童が自宅マンションから転落死	
12月		
2015	戦後70年、学生の社会運動グループSEALDs活動、ノーベル賞2人受賞(イベルメクテン、カミオカンデ)、関東・東北豪雨、辺野工事に着手、マンション基礎工事データ改ざん、TPP合意、自撮り棒ブーム、インバウンド急増、クローズアップ現代やらせ問題、全国子ども電話相談室リアルが終了、児童相談所虐待対応ダイヤルが覚えやすくかけやすい全国共通の3桁「189」となる、 【法】安全保障関連法成立	【流行語】 あったがいんだからあ〜、ミニマリスト、ドローン、五郎丸ポーズ、爆買い、一億総活躍社会 【芸能関係】 私以外私じゃないの、トリセツ 【テレビ・映画】 まれ、下町ロケット、流星ワゴン、残念な夫、ベイマックス、ピリギヤル、新劇の巨人、バケモノの子
2月	【い】【ネ】神奈川県川崎市立中学校の男子生徒が複数人の少年よりの暴行死	
3月	【い】千葉県柏市立中学校で2年女子生徒が校舎から飛び降り重体	
4月	栃木県佐野市の小学校の保護者2人が相次いで自殺。自殺した2人の母親は他の保護者から「ママ友	

7月	いじめ」を受ける 【い】【自】岩手県矢巾町立中学校の2年男子生徒がいじめを苦しんで自殺 【い】兵庫県姫路市立中学校で1年男子生徒が先輩より暴行被害。教諭は隠蔽 【虐】宮古島の自宅で3歳女児が父親よりの暴行死	【本】 火花、家族という病 【マンガ】 弱虫ペダル 【ゲーム】 スプラトゥーン
9月	【い】【自】福島県会津地方の県立高校に通う女子生徒が部活動でのいじめを苦しんで自殺 【い】【自】高知県南国市立中学校の3年男子生徒が自殺 【い】【自】東京都立高校の1年男子生徒がいじめ被害と学校の無対応により自殺 【い】【自】沖縄県豊見城市立小学校の4年男子児童が自殺	
11月	【い】【自】名古屋市の市立中学校の1年男子生徒がいじめを苦しんで地下鉄に飛び込み自殺	
2016	保育園落ちた日本死ぬ、豊洲移転問題、東京五輪エンブレム盗作疑惑、NHK「ニュース7」見えにくい相対的貧困の問題、スキーバス転落事故、北海道新幹線開通、オバマ大統領広島訪問、伊勢志摩サミット、東京小金井市女子大生ストーカー刺傷事件、北海道山中不明男子6日ぶり発見、選挙権年齢引き下げ施行、神奈川県相模原市障害者施設19人刺殺事件、台風10号豪雨被害、トランプ米大統領就任、福岡市大規模陥没事故、プーチン大統領来日、 【法】ヘイトスピーチ解消法成立施行 【法】カジノ法成立施行 【法】普通教育機会確保法	【流行語】 神ってる、聖地巡礼、トランプ現象、ゲス不倫、盛り土、おそ松さん 【芸能関係】 スマップ解散、ピコ太郎、BABYMETAL、恋(恋ダンス)、前前世、サイレントマジョリティ、ポプディランノベル文学賞 【テレビ・映画】 逃げるは恥だが役に立つ、家族ノカタチ、ゆとりですがなにか、家政婦のミタゾノ、この世界の片隅に、君の名は。、母と暮らせば 【本】 コンビニ人間、君の膵臓をたべたい、嫌われる勇気、幸せになる勇気 【マンガ】 キングダム、僕のヒーローアカデミア、ワンパンマン 【ゲーム】 ブレイステーションVR、ファイナルファンタジー、妖怪三国志
1月	【虐】埼玉県狭山市で3歳女児が母親と交際相手の男より暴行死	
2月	【い】仙台市立中学校の男子生徒が自殺	
3月	姫路市立中学校で部活動でのいじめを隠蔽した教師が停職処分	
4月	【い】【ネ】北九州市の私立高2年女子生徒がLINEでメッセージを送った直後に自殺	
5月	【い】千葉県松戸市立小学校でいじめ被害の児童が担任教諭の指示をうけた加害児童より暴行される	
7月	【い】【自】山口県立高校2年男子生徒が同級生からのいじめ、教職員からのいじめに類する行為を苦しんで自殺	
8月	埼玉河川敷少年集団暴行で16歳少年死亡、5人の少年を逮捕、 【い】【自】青森県東北町立中学校の1年男子生徒が自殺 【い】【自】青森市立中学校の2年女子生徒がいじめを苦しんで遺書を残し自殺	
11月	【い】横浜市立小学校に通っていた男子児童が「震災いじめ」被害 【い】原発事故避難者で新潟市立小学校に通う5年児童が担任や同級生より「震災いじめ」被害	
2017	森友学園問題、加計学園問題、藤井フィーバーで将棋人気、カズオ・イシグロノーベル文学賞受賞、ブックカフェが国内で千店舗超え、メディアミックス、求人倍率高水準でバブル期を超える、働き方改革、生活保護なめんなジャンパー、プレミアムフライデー、性暴力撲滅を訴える「フラワーデモ」が各地に広がる、パンダの赤ちゃんシャンシャン誕生、九州北部水害、座間9人殺害事件、 【法】性犯罪厳罰化 【法】児童虐待防止法改正 【法】児童福祉法改正	【流行語】 インスタ映え、チューナーバー、うんこ漢字ドリル、村度、○○ファースト、ワンオペ育児、ちーがーうーだーろー! 【芸能関係】 バブリーダンス、TWICE(K-POP)、不協和音、インフルエンサー、we are(one ok rock) 【テレビ・映画】 過保護のカホコ、けものフレンズ、東京タラレバ娘、レンタルの恋、君の膵臓をたべたい、チア☆ダン 【本】 うつヌケ、死ぬくらいなら会社辞めれば、蜜蜂と迅雷" 【マンガ】 君たちはどう生きるか" 【ゲーム】 ニンテンドウ スイッチ" 【スポーツ】 桐生祥秀が日本人初の9秒台
1月	【法】いじめ防止対策推進法改正	
4月	【い】福島県須賀川市立中学校の1年男子生徒が自殺	
6月	【い】【自】仙台市立中学校で2年男子生徒が自殺	
9月	【い】【自】【ネ】埼玉県立高校2年女子生徒がネット上での不適切な書き込み被害を苦しんで自殺	
10月	【い】【自】新潟県新潟市立中学校の2年男子生徒が自殺 【い】埼玉県川口市立中学校の3年男子生徒がいじめ被害により不登校	
12月	福井県池田町立中学校の2年男子生徒が自殺した問題で町内の飲食店がネット上の偽情報により中傷や嫌がらせ被害 【い】【ネ】埼玉県鶴ヶ島市立小学校の6年女子児童が飛び降り自殺	
2018	西日本豪雨、国内最高記録41.1℃(埼玉熊谷市)、台風21号被害、北海道胆振地方で震度7の地震、スーパーボランティア、#私たちは女性差別に怒っていい、チケットック、成人式晴れ着のハレノヒ詐欺事件、はやぶさ2が「りゅうぐう」に到着、成人年齢18歳に引き下げ、 【法】働き方改革法案	【流行語】 そだねー、eスポーツ、半端ないって、おっさんずラブ、ポーっと生きてんじゃねーよ!、#MeToo 【芸能関係】 lemon、マリーゴールド、シンクロニシティ、アイノカタチ 【テレビ・映画】 チョコちゃんに叱られる、義母と娘のブルース、この世界の片隅に、ハラスメントゲーム、部活好きじゃなきゃダメですか?、万引き家族、カメラを止めるな 【本】 モデルが秘密にしたがる体幹リセットダイエット、ゼロトレ 【マンガ】 約束のネバーランド 【スポーツ】 大谷メジャーリーガー、大坂なおみ日本人初の4大大会制覇
1月	【い】福井県敦賀市立小学校で児童が6年生担当の教諭よりいじめ被害 【い】【ネ】新潟県立高校で男子生徒が同級生の女子生徒よりいじめ被害。動画をネットにアップされる	
3月	【虐】東京都目黒区で5歳女児が両親よりの虐待死	
5月	【い】【自】熊本県立高校の3年女子生徒が遺書を残して自殺	
8月	【い】【自】東京都八王子市立中学校の2年女子生徒が転校前のいじめを苦しんで自殺 【い】【自】【ネ】三重県立高校1年男子が自殺	
10月	【ネ】福井県内で10代少女がツイッターで知り合った人より強制性交致傷被害	
11月	【い】仙台市で母親が小学2年女子児童が児童へのいじめを苦しめた母親の無理心中により死亡	

まとめ

この度、10年間にチャイルドラインが受信した子どもの声の膨大なデータを子どもの状況や社会の変化と共に分析し、冊子という形でまとめてお届けすることができました。

作業を進めていくにつれ、ここにまとめられたのは10年間の子どもたちの気持ちのあれこれのほんの一部、表に見えやすい部分だけだということ強く感じました。もっと深く分析をしていきたいという思いを持ちながら、事業としての区切りをつけなければならず、まとめる作業を終えました。チャイルドラインのデータを子ども施策に活かせるエビデンスとして、今後も発信していきたいと考えています。この冊子の中で子どもたちは、「日本はこんなに生きにくい社会だよ」とチャイルドラインに教えてくれています。私たちはこのような形でまとめることで何十万という子どもたちの社会参画をわずかながら実現できたと考えています。子どもたちの声を受けとめ続けていく私たちは、子どもが生きやすい社会の実現を目指し、歩みをさらに強く進めなくてはならないと身の引き締まる思いでいます。

冊子をまとめるにあたり、内田様はじめ、ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

編集・制作

チャイルドライン支援センター アドボカシー・広報・ファンド部 フリーダイヤル10年データ分析チーム

竹村浩、田野浩美、高橋弘恵、中村尊

須永祐慈（ツナガルラボ データ集計）

鈴木雄大（座談会テープ起こし）

フリーダイヤル10年

チャイルドラインに届いた声から子どもの状況を考察する

（発行日）2021年3月25日

（発行者）認定特定非営利活動法人チャイルドライン支援センター

代表理事 竹村浩／代表理事 小林純子

〒162-0808 東京都新宿区天神町14 神楽坂藤井ビル5F

電話:03-5946-8500

メール:info@childline.or.jp

ウェブサイト:https://www.childline.or.jp

（デザイン・レイアウト）イノウデザイン株式会社

（印刷）株式会社グラフィック

copyright© Childline support center 2021

この報告書は令和2年度地域自殺対策強化交付金(自殺防止対策事業)により作成されました



18歳までの子どもがつながる

チャイルドライン®